

きょうのみことば

コンプリート版・第1巻

マタイによる福音書・マルコによる福音書

ルカによる福音書・ヨハネによる福音書



今日のイズニク（ニカイア公会議が行われた）

発行：日本キリスト合同教会広報委員会

目 次

	通読✓	聖書箇所		頁数
第1日	□ □	マタイによる福音書1：1～17	⋯⋯⋯	1
第2日	□ □	マタイによる福音書1：18～25	⋯⋯⋯	1
第3日	□ □	マタイによる福音書2：1～12	⋯⋯⋯	1
第4日	□ □	マタイによる福音書2：13～23	⋯⋯⋯	1
第5日	□ □	マタイによる福音書3：1～12	⋯⋯⋯	2
第6日	□ □	マタイによる福音書3：13～17	⋯⋯⋯	2
第7日	□ □	マタイによる福音書4：1～11	⋯⋯⋯	2
第8日	□ □	マタイによる福音書4：12～25	⋯⋯⋯	2
第9日	□ □	マタイによる福音書5：1～16	⋯⋯⋯	3
第10日	□ □	マタイによる福音書5：17～26	⋯⋯⋯	3
第11日	□ □	マタイによる福音書5：27～32	⋯⋯⋯	3
第12日	□ □	マタイによる福音書5：33～48	⋯⋯⋯	3
第13日	□ □	マタイによる福音書6：1～15	⋯⋯⋯	4
第14日	□ □	マタイによる福音書6：16～24	⋯⋯⋯	4
第15日	□ □	マタイによる福音書6：25～34	⋯⋯⋯	4
第16日	□ □	マタイによる福音書7：1～14	⋯⋯⋯	4
第17日	□ □	マタイによる福音書7：15～29	⋯⋯⋯	5
第18日	□ □	マタイによる福音書8：1～17	⋯⋯⋯	5
第19日	□ □	マタイによる福音書8：18～34	⋯⋯⋯	5
第20日	□ □	マタイによる福音書9：1～13	⋯⋯⋯	5
第21日	□ □	マタイによる福音書9：14～26	⋯⋯⋯	6
第22日	□ □	マタイによる福音書9：27～38	⋯⋯⋯	6
第23日	□ □	マタイによる福音書10：1～15	⋯⋯⋯	6
第24日	□ □	マタイによる福音書10：16～33	⋯⋯⋯	6
第25日	□ □	マタイによる福音書10：34～11：1	⋯⋯⋯	7
第26日	□ □	マタイによる福音書11：2～19	⋯⋯⋯	7
第27日	□ □	マタイによる福音書11：20～30	⋯⋯⋯	7
第28日	□ □	マタイによる福音書12：1～21	⋯⋯⋯	7
第29日	□ □	マタイによる福音書12：22～37	⋯⋯⋯	8
第30日	□ □	マタイによる福音書12：38～50	⋯⋯⋯	8
第31日	□ □	マタイによる福音書13：1～17	⋯⋯⋯	8
第32日	□ □	マタイによる福音書13：18～30	⋯⋯⋯	8

目 次

	通読✓	聖書箇所	頁数
第33日	□ □	マタイによる福音書13：31～43	．．．．．9
第34日	□ □	マタイによる福音書13：44～58	．．．．．9
第35日	□ □	マタイによる福音書14：1～12	．．．．．9
第36日	□ □	マタイによる福音書14：13～21	．．．．．9
第37日	□ □	マタイによる福音書14：22～36	．．．．10
第38日	□ □	マタイによる福音書15：1～20	．．．．10
第39日	□ □	マタイによる福音書15：21～39	．．．．10
第40日	□ □	マタイによる福音書16：1～12	．．．．10
第41日	□ □	マタイによる福音書16：13～20	．．．．11
第42日	□ □	マタイによる福音書16：21～28	．．．．11
第43日	□ □	マタイによる福音書17：1～13	．．．．11
第44日	□ □	マタイによる福音書17：14～27	．．．．11
第45日	□ □	マタイによる福音書18：1～14	．．．．12
第46日	□ □	マタイによる福音書18：15～35	．．．．12
第47日	□ □	マタイによる福音書19：1～15	．．．．12
第48日	□ □	マタイによる福音書19：16～30	．．．．12
第49日	□ □	マタイによる福音書20：1～19	．．．．13
第50日	□ □	マタイによる福音書20：20～34	．．．．13
第51日	□ □	マタイによる福音書21：1～11	．．．．13
第52日	□ □	マタイによる福音書21：12～27	．．．．13
第53日	□ □	マタイによる福音書21：28～46	．．．．14
第54日	□ □	マタイによる福音書22：1～22	．．．．14
第55日	□ □	マタイによる福音書22：23～46	．．．．14
第56日	□ □	マタイによる福音書23：1～22	．．．．14
第57日	□ □	マタイによる福音書23：23～39	．．．．15
第58日	□ □	マタイによる福音書24：1～14	．．．．15
第59日	□ □	マタイによる福音書24：15～31	．．．．15
第60日	□ □	マタイによる福音書24：32～51	．．．．15
第61日	□ □	マタイによる福音書25：1～13	．．．．16
第62日	□ □	マタイによる福音書25：14～30	．．．．16
第63日	□ □	マタイによる福音書25：31～46	．．．．16
第64日	□ □	マタイによる福音書26：1～16	．．．．16

目 次

	通読✓	聖書箇所	頁数
第65日	□ □	マタイによる福音書26：17～30	・・・17
第66日	□ □	マタイによる福音書26：31～46	・・・17
第67日	□ □	マタイによる福音書26：47～56	・・・17
第68日	□ □	マタイによる福音書26：57～75	・・・17
第69日	□ □	マタイによる福音書27：1～10	・・・18
第70日	□ □	マタイによる福音書27：11～26	・・・18
第71日	□ □	マタイによる福音書27：27～44	・・・18
第72日	□ □	マタイによる福音書27：45～66	・・・18
第73日	□ □	マタイによる福音書28：1～20	・・・19
第74日	□ □	マルコによる福音書1：1～15	・・・20
第75日	□ □	マルコによる福音書1：16～34	・・・20
第76日	□ □	マルコによる福音書1：35～45	・・・20
第77日	□ □	マルコによる福音書2：1～17	・・・20
第78日	□ □	マルコによる福音書2：18～28	・・・21
第79日	□ □	マルコによる福音書3：1～19	・・・21
第80日	□ □	マルコによる福音書3：20～35	・・・21
第81日	□ □	マルコによる福音書4：1～9	・・・21
第82日	□ □	マルコによる福音書4：10～20	・・・22
第83日	□ □	マルコによる福音書4：21～34	・・・22
第84日	□ □	マルコによる福音書4：35～41	・・・22
第85日	□ □	マルコによる福音書5：1～20	・・・22
第86日	□ □	マルコによる福音書5：21～34	・・・23
第87日	□ □	マルコによる福音書5：35～43	・・・23
第88日	□ □	マルコによる福音書6：1～13	・・・23
第89日	□ □	マルコによる福音書6：14～29	・・・23
第90日	□ □	マルコによる福音書6：30～44	・・・24
第91日	□ □	マルコによる福音書6：45～56	・・・24
第92日	□ □	マルコによる福音書7：1～13	・・・24
第93日	□ □	マルコによる福音書7：14～23	・・・24
第94日	□ □	マルコによる福音書7：24～37	・・・25
第95日	□ □	マルコによる福音書8：1～10	・・・25
第96日	□ □	マルコによる福音書8：11～21	・・・25

目 次

	通読✓	聖書箇所	頁数
第97日	□ □	マルコによる福音書8：22～30	・・・25
第98日	□ □	マルコによる福音書8：31～9：1	・・・26
第99日	□ □	マルコによる福音書9：2～13	・・・26
第100日	□ □	マルコによる福音書9：14～32	・・・26
第101日	□ □	マルコによる福音書9：33～50	・・・26
第102日	□ □	マルコによる福音書10：1～16	・・・27
第103日	□ □	マルコによる福音書10：17～31	・・・27
第104日	□ □	マルコによる福音書10：32～45	・・・27
第105日	□ □	マルコによる福音書10：46～52	・・・27
第106日	□ □	マルコによる福音書11：1～11	・・・28
第107日	□ □	マルコによる福音書11：12～19	・・・28
第108日	□ □	マルコによる福音書11：20～33	・・・28
第109日	□ □	マルコによる福音書12：1～12	・・・28
第110日	□ □	マルコによる福音書12：13～27	・・・29
第111日	□ □	マルコによる福音書12：28～44	・・・29
第112日	□ □	マルコによる福音書13：1～13	・・・29
第113日	□ □	マルコによる福音書13：14～37	・・・29
第114日	□ □	マルコによる福音書14：1～11	・・・30
第115日	□ □	マルコによる福音書14：12～26	・・・30
第116日	□ □	マルコによる福音書14：27～42	・・・30
第117日	□ □	マルコによる福音書14：43～52	・・・30
第118日	□ □	マルコによる福音書14：53～72	・・・31
第119日	□ □	マルコによる福音書15：1～15	・・・31
第120日	□ □	マルコによる福音書15：16～32	・・・31
第121日	□ □	マルコによる福音書15：33～47	・・・31
第122日	□ □	マルコによる福音書16：1～8	・・・32
第123日	□ □	マルコによる福音書16：9～20	・・・32
第124日	□ □	ルカによる福音書1：1～25	・・・33
第125日	□ □	ルカによる福音書1：26～38	・・・33
第126日	□ □	ルカによる福音書1：39～56	・・・33
第127日	□ □	ルカによる福音書1：57～80	・・・33
第128日	□ □	ルカによる福音書2：1～21	・・・34

目 次

	通読✓	聖書箇所	頁数
第129日	□ □	ルカによる福音書2：22～40	・・・34
第130日	□ □	ルカによる福音書2：41～52	・・・34
第131日	□ □	ルカによる福音書3：1～20	・・・34
第132日	□ □	ルカによる福音書3：21～38	・・・35
第133日	□ □	ルカによる福音書4：1～13	・・・35
第134日	□ □	ルカによる福音書4：14～30	・・・35
第135日	□ □	ルカによる福音書4：31～44	・・・35
第136日	□ □	ルカによる福音書5：1～16	・・・36
第137日	□ □	ルカによる福音書5：17～26	・・・36
第138日	□ □	ルカによる福音書5：27～39	・・・36
第139日	□ □	ルカによる福音書6：1～11	・・・36
第140日	□ □	ルカによる福音書6：12～36	・・・37
第141日	□ □	ルカによる福音書6：37～49	・・・37
第142日	□ □	ルカによる福音書7：1～17	・・・37
第143日	□ □	ルカによる福音書7：18～35	・・・37
第144日	□ □	ルカによる福音書7：36～50	・・・38
第145日	□ □	ルカによる福音書8：1～15	・・・38
第146日	□ □	ルカによる福音書8：16～21	・・・38
第147日	□ □	ルカによる福音書8：22～39	・・・38
第148日	□ □	ルカによる福音書8：40～56	・・・39
第149日	□ □	ルカによる福音書9：1～9	・・・39
第150日	□ □	ルカによる福音書9：10～27	・・・39
第151日	□ □	ルカによる福音書9：28～36	・・・39
第152日	□ □	ルカによる福音書9：37～45	・・・40
第153日	□ □	ルカによる福音書9：46～62	・・・40
第154日	□ □	ルカによる福音書10：1～16	・・・40
第155日	□ □	ルカによる福音書10：17～24	・・・40
第156日	□ □	ルカによる福音書10：25～42	・・・41
第157日	□ □	ルカによる福音書11：1～13	・・・41
第158日	□ □	ルカによる福音書11：14～28	・・・41
第159日	□ □	ルカによる福音書11：29～36	・・・41
第160日	□ □	ルカによる福音書11：37～54	・・・42

目 次

	通読✓	聖書箇所	頁数
第161日	□ □	ルカによる福音書12：1～12	・・・42
第162日	□ □	ルカによる福音書12：13～21	・・・42
第163日	□ □	ルカによる福音書12：22～34	・・・42
第164日	□ □	ルカによる福音書12：35～48	・・・43
第165日	□ □	ルカによる福音書12：49～59	・・・43
第166日	□ □	ルカによる福音書13：1～9	・・・43
第167日	□ □	ルカによる福音書13：10～21	・・・43
第168日	□ □	ルカによる福音書13：22～35	・・・44
第169日	□ □	ルカによる福音書14：1～14	・・・44
第170日	□ □	ルカによる福音書14：15～24	・・・44
第171日	□ □	ルカによる福音書14：25～35	・・・44
第172日	□ □	ルカによる福音書15：1～10	・・・45
第173日	□ □	ルカによる福音書15：11～32	・・・45
第174日	□ □	ルカによる福音書16：1～13	・・・45
第175日	□ □	ルカによる福音書16：14～31	・・・45
第176日	□ □	ルカによる福音書17：1～10	・・・46
第177日	□ □	ルカによる福音書17：11～19	・・・46
第178日	□ □	ルカによる福音書17：20～37	・・・46
第179日	□ □	ルカによる福音書18：1～14	・・・46
第180日	□ □	ルカによる福音書18：15～30	・・・47
第181日	□ □	ルカによる福音書18：31～43	・・・47
第182日	□ □	ルカによる福音書19：1～10	・・・47
第183日	□ □	ルカによる福音書19：11～27	・・・47
第184日	□ □	ルカによる福音書19：28～48	・・・48
第185日	□ □	ルカによる福音書20：1～19	・・・48
第186日	□ □	ルカによる福音書20：20～26	・・・48
第187日	□ □	ルカによる福音書20：27～47	・・・48
第188日	□ □	ルカによる福音書21：1～19	・・・49
第189日	□ □	ルカによる福音書21：20～38	・・・49
第190日	□ □	ルカによる福音書22：1～23	・・・49
第191日	□ □	ルカによる福音書22：24～34	・・・49
第192日	□ □	ルカによる福音書22：35～53	・・・50

目 次

	通読✓	聖書箇所	頁数
第193日	□ □	ルカによる福音書22：54～71	・・・50
第194日	□ □	ルカによる福音書23：1～12	・・・50
第195日	□ □	ルカによる福音書23：13～25	・・・50
第196日	□ □	ルカによる福音書23：26～43	・・・51
第197日	□ □	ルカによる福音書23：44～56	・・・51
第198日	□ □	ルカによる福音書24：1～12	・・・51
第199日	□ □	ルカによる福音書24：13～35	・・・51
第200日	□ □	ルカによる福音書24：36～53	・・・52
第201日	□ □	ヨハネによる福音書1：1～18	・・・53
第202日	□ □	ヨハネによる福音書1：19～34	・・・53
第203日	□ □	ヨハネによる福音書1：35～51	・・・53
第204日	□ □	ヨハネによる福音書2：1～12	・・・53
第205日	□ □	ヨハネによる福音書2：13～25	・・・54
第206日	□ □	ヨハネによる福音書3：1～15	・・・54
第207日	□ □	ヨハネによる福音書3：16～21	・・・54
第208日	□ □	ヨハネによる福音書3：22～36	・・・54
第209日	□ □	ヨハネによる福音書4：1～26	・・・55
第210日	□ □	ヨハネによる福音書4：27～42	・・・55
第211日	□ □	ヨハネによる福音書4：43～54	・・・55
第212日	□ □	ヨハネによる福音書5：1～18	・・・55
第213日	□ □	ヨハネによる福音書5：19～30	・・・56
第214日	□ □	ヨハネによる福音書5：31～47	・・・56
第215日	□ □	ヨハネによる福音書6：1～15	・・・56
第216日	□ □	ヨハネによる福音書6：16～33	・・・56
第217日	□ □	ヨハネによる福音書6：34～40	・・・57
第218日	□ □	ヨハネによる福音書6：41～59	・・・57
第219日	□ □	ヨハネによる福音書6：60～71	・・・57
第220日	□ □	ヨハネによる福音書7：1～9	・・・57
第221日	□ □	ヨハネによる福音書7：10～24	・・・58
第222日	□ □	ヨハネによる福音書7：25～36	・・・58
第223日	□ □	ヨハネによる福音書7：37～53	・・・58
第224日	□ □	ヨハネによる福音書8：1～11	・・・58

目 次

	通読✓	聖書箇所	頁数
第225日	□ □	ヨハネによる福音書8：12～20	・・・59
第226日	□ □	ヨハネによる福音書8：21～30	・・・59
第227日	□ □	ヨハネによる福音書8：31～47	・・・59
第228日	□ □	ヨハネによる福音書8：48～59	・・・59
第229日	□ □	ヨハネによる福音書9：1～12	・・・60
第230日	□ □	ヨハネによる福音書9：13～23	・・・60
第231日	□ □	ヨハネによる福音書9：24～41	・・・60
第232日	□ □	ヨハネによる福音書10：1～21	・・・60
第233日	□ □	ヨハネによる福音書10：22～42	・・・61
第234日	□ □	ヨハネによる福音書11：1～16	・・・61
第235日	□ □	ヨハネによる福音書11：17～37	・・・61
第236日	□ □	ヨハネによる福音書11：38～44	・・・61
第237日	□ □	ヨハネによる福音書11：45～57	・・・62
第238日	□ □	ヨハネによる福音書12：1～11	・・・62
第239日	□ □	ヨハネによる福音書12：12～19	・・・62
第240日	□ □	ヨハネによる福音書12：20～26	・・・62
第241日	□ □	ヨハネによる福音書12：17～36a	・・・63
第242日	□ □	ヨハネによる福音書12：36b～50	・・・63
第243日	□ □	ヨハネによる福音書13：1～20	・・・63
第244日	□ □	ヨハネによる福音書13：21～30	・・・63
第245日	□ □	ヨハネによる福音書13：31～38	・・・64
第246日	□ □	ヨハネによる福音書14：1～14	・・・64
第247日	□ □	ヨハネによる福音書14：15～31	・・・64
第248日	□ □	ヨハネによる福音書15：1～17	・・・64
第249日	□ □	ヨハネによる福音書15：18～27	・・・65
第250日	□ □	ヨハネによる福音書16：1～16	・・・65
第251日	□ □	ヨハネによる福音書16：16～24	・・・65
第252日	□ □	ヨハネによる福音書16：25～33	・・・65
第253日	□ □	ヨハネによる福音書17：1～19	・・・66
第254日	□ □	ヨハネによる福音書17：20～26	・・・66
第255日	□ □	ヨハネによる福音書18：1～14	・・・66
第256日	□ □	ヨハネによる福音書18：15～27	・・・66

目次

	通読✓	聖書箇所	頁数
第257日	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	ヨハネによる福音書18：28～40	・・・67
第258日	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	ヨハネによる福音書19：1～16a	・・・67
第259日	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	ヨハネによる福音書19：16b～27	・・・67
第260日	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	ヨハネによる福音書19：28～37	・・・67
第261日	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	ヨハネによる福音書19：38～42	・・・68
第262日	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	ヨハネによる福音書20：1～18	・・・68
第263日	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	ヨハネによる福音書20：19～31	・・・68
第264日	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	ヨハネによる福音書21：1～14	・・・68
第265日	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	ヨハネによる福音書21：15～25	・・・69

第1日

マタイによる福音書1：1～17

「アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図」(1節)。新約聖書の記念すべき最初の御言葉です。イエスはキリスト(救い主)であり、肉においても信仰においても、イスラエルの血を受け継ぐアブラハムの子孫であること。神が立てられた王ダビデの子として、世界を治める方であることが、力強く宣言されています。さらにこの救い主が旧約聖書に預言された方であることも、これらの系図は物語っています。

(執筆・初出：笹山緑・2008年1月)

第3日

マタイによる福音書2：1～12

異邦人である東方の学者たちが、いち早く救い主の誕生に気づいて主イエスを探しにきたのに対し、ユダヤ人でありメシア預言を知っているはずのヘロデやエルサレムの人々は「不安を抱いた」(3節)とあります。キリストの出来事は外部から見た方が、その光がはっきりと輝いて見えるのかもしれませんが。わたしたちクリスチャンが鈍感になっていることがないでしょうか。救いを求めている人々に主イエスを伝えていきましょう。

(執筆・初出：品川謙一・2003年8月)

第2日

マタイによる福音書1：18～25

「主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった」(22節)。イエスの誕生は神のご計画であり御心です。ここにキリスト教信仰の重要な意味があります。イエスというのは、いわゆる世界の三大聖人の一人というような方ではありません。創造者である神の計画によつての出生であり、それは全人類の救いのための存在であることを語っているのです。それゆえその名は「インマヌエル」と呼ばれます。

(執筆・初出：大井尚・2012年1月)

第4日

マタイによる福音書2：13～23

聖書の中には人道的な立場からは理解に苦しむ記事が幾つかあります。イエスの誕生によって犠牲となった男の子がいたという事実です。これはヘロデの罪によって生じた悲しい事件です。イエスによって人間の全ての罪が明らかにされつ、その十字架によって救いが成し遂げられました。わたしが生きることによって多くの罪が生じたこともあるはずですが。罪の赦しがなければ人間は誰一人生きていることはできません。

(執筆・初出：大井尚・2012年1月)

第5日

マタイによる福音書3：1～12

「悔い改めよ。天の国は近づいた」(2節)。人間にとってまず必要なことは「悔い改める」ことです。それは今日ますます必要になっています。なぜなら人間がますます傲慢になっているからです。科学の進歩、経済意識や政治意識の絶対化、それらはいずれも人間が神のようになっている社会を作っています。しかし人間は罪人です。人間は神ではありません。「悔い改め」が必要です。罪の赦しが必要だからです。

(執筆・初出：大井尚・2012年1月)

第7日

マタイによる福音書4：1～11

「…と書いてある」(4節)。荒れ野はイスラエルの民にとっても、試練と同時に信仰の確認の場でもありました。誘惑とは、わたしたちの弱点を突いてくるものです。人間は、自分を強くして戦いますが、わたしたち信仰者は、御言葉で戦いましょう。神の子がそうさったのですから、わたしたちは御言葉を武器として、御言葉に立ちましょう。悪魔も御言葉には、打ち勝つことができません。

(執筆・初出：三浦寿夫・2012年1月)

第6日

マタイによる福音書3：13～17

なぜイエスは洗礼を受けられたのか。これは多くの人の疑問でしょう。15節にイエスの答えがあります。「我々にふさわしい」と言って、ヨハネとイエスの関係とその役割と使命を、神の救いの業との関連で述べられています。神の子であるイエスが罪人である人間の救いのために「人」となられた、なられる必要があったのです。イエスはわたしたちの罪の救いのために罪人となられたのです。

(執筆・初出：大井尚・2003年9月)

第8日

マタイによる福音書4：12～25

「二人はすぐに網を捨てて従った」(20節)。「網を捨て、舟と父親とを残して」(22節) イエスに従った二組の兄弟。生活の糧を得るための道具や家族を捨てて、イエスに従うなんて、わたしには関係ないと思って読んでいる方はいらっしゃいませんか。彼らもお招きを受けるまでは、そんなことは考えても見なかったことでしょう。イエスの招きには力があります。もしお招きを受けたら、この弟子たちを思い出しましょう。

(執筆・初出：大井満・2008年1月)

第9日

マタイによる福音書5：1～16

「心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである」(3節)。ケセン語訳聖書では次のように訳が試みられています。「頼りなく、望みなく、心細い人々幸せだ。神様の懐に抱がさんの人々その人達だ」(山浦玄嗣氏訳)。頼りなく、望みなく、心細い人をこそ、神がふところに抱いてくださるといのです。努力して一定の資格に達した人が救われるわけではありません。そのままの姿で、わたしたちは救われます。

(執筆・初出：大井満・2008年1月)

第11日

マタイによる福音書5：27～32

「もし、右の目があなたをつまずかせるなら、えぐり出して捨ててしまいなさい」(29節)。目をえぐり出す、手を切り落とす、いずれもわたしたちにはできません。しかしイエスは、罪がそれほど深刻であると教えられたのです。心の内に巣くう罪からわたしたちの命を贖うことができるのは、あの十字架の血潮だけです。それは罪の報酬である死を主が受けてくださったからです。

(執筆・初出：三浦寿夫・2012年1月)

第10日

マタイによる福音書5：17～26

「廃止するためではなく、完成するためである」(17節)。イエスは律法を完成するために来たと言われました。律法を完成するとは、どういうことでしょうか。鍵は、全身全霊で神を愛し、隣人を自分のように愛するということでしょう。でもそれは、形ではなく、わたしたちの心はその通りになるということです。イエスは、わたしたちの心に、ご自身の“霊”を与えることによって、律法を完成してくださいます。

(執筆・初出：三浦寿夫・2012年1月)

第12日

マタイによる福音書5：33～48

「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」(44節)。それは、大変困難なことです。しかし、主の言葉に従ってみることによってわかる祝福があります。この命令に従うとき、イエスの思いに触れさせていただく気がします。イエスがそうしてくださいました。もしイエスの命令として、迫害する者のために祈るなら、祈りの対象を憎むことなどできないということに気付くでしょう。

(執筆・初出：三浦寿夫・2012年1月)

第13日

マタイによる福音書6：1～15

「見てもらおうとして、人の前で善行をしないように注意なさい」（1節）。善いことは見せたい、これが人間の心情ではないでしょうか。しかし、それはすでに報いを受けてしまうことになるのでイエスは言われました。見せたいと思うそのことが、善行を台無しにしてしまうのです。せっかくの善行を、自分の報いの道具にしてしまうのです。報いのことなど、忘れていけば、神がきっと喜んでくださいます。

（執筆・初出：三浦寿夫・2012年1月）

第15日

マタイによる福音書6：25～34

「思い悩む」という言葉（ギリシャ語）は、心が二つに分かれるという意味です。ああでもない、こうでもないという状態は基準が定まっていないという状態です。イエスは神を信じ神に委ねなさいと教えておられます。今日一日も、また一度の人生そのものも、何と悩みが多いことでしょうか。思い悩んで人生を終わるのは悲しいです。「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい」とは、わたしたちの人生の基準です。

（執筆・初出：大井尚・2003年9月）

第14日

マタイによる福音書6：16～24

「隠れたところにおられるあなたの父に見ていただくためである」（18節）。「断食」は自分の信仰のためにする善い業です。それは神に対する自分の信仰のためのものですが、他人の評価を期待する善になりがちです。断食に限らず、あらゆる信仰の業、奉仕も神に喜んでいただき、神の御心にかなうようにすべきなのです。「人に見てもらおうと」するのではなく、神に喜んでいただくために。

（執筆・初出：大井尚・2008年2月）

第16日

マタイによる福音書7：1～14

「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」（12節）とイエスは教えられました。ユダヤ教の学者ヒレルは「して欲しくないことを、隣人にするな」という主旨のことを教えていたそうです。これだけでも社会はずいぶん住みやすくなります。しかしイエスの教えは積極的です。それこそ愛の教えです。自分中心の人間社会の中で、このように生きられたら良いのではないのでしょうか。

（執筆・初出：大井尚・2008年2月）

第17日

マタイによる福音書7：15～29

「聞くだけで行わない者は」(26節)とのイエスのお言葉は、最も耳の痛いお言葉の一つです。わたしたちの信仰が観念的な段階にとどまっていたり、単なる理念や言葉だけの自分中心の信仰であるからではないでしょうか。あるいは信仰が単なる知識や思想であつたりすることも反省材料です。砂上の楼閣と言われがちな信仰ではなく、実際の生活に生きたものとなるために、礼拝の生活をまず確立したいと思います。

(執筆・初出：大井尚・2008年2月)

第19日

マタイによる福音書8：18～34

「神の子、かまわないでくれ」(29節)。悪霊にとって都合が悪いのです。わたしたちの中に悪霊が住んでいないでしょうか。「神さま、今はそっとしておいてください」。わたしたちの人生の中で、そのように思ったことはありませんでしょうか。しかしイエスの力は圧倒しています。人間の根本的な罪を追い出されます。問題の根本は罪にあります。それを取り除いていただかなければ人生の根本的な解決にはなりません。

(執筆・初出：大井尚・2008年2月)

第18日

マタイによる福音書8：1～17

百人隊長の懇願に対して、「わたしが行って、いやしてあげよう」(7節)と言われたイエス。その主の御言葉、そのものの權威を認め、信頼した百人隊長。イエスは「あなたが信じたとおりになるように」と言っておられます。わたしたちもこのように、主を信頼し、御言葉を信頼したいと思います。わたしたちは主を、自分の判断の中に置き、自分の判断で結果をも測っていないでしょうか。主は力ある主です。

(執筆・初出：三浦寿夫・2003年9月)

第20日

マタイによる福音書9：1～13

「わたしに従いなさい」(9節)。イエスがマタイを弟子にするために招かれたお言葉です。全く唐突です。何か理由があったでしょうか。何か条件が求められたでしょうか。全く一方的なイエスの招きです。わたしたちがイエスの弟子になるためには何の理由も条件も必要はありません。「立ち上がってイエスに従った」とあります。神の招き、救いにはただ従うだけで充分なのです。神が必要とされているのです。

(執筆・初出：大井尚・2008年2月)

第21日

マタイによる福音書9：14～26

「服の房」(20節)は律法を表していたそうです。汚れた者は触れてはいけません。しかしこの女は、イエスの身につけておられる一番端の部分に、ちょっとさわらせていただいたら治ると信じたのでしょう。律法を超えた福音の力が働いたと思ってよいのではないのでしょうか。律法的信仰を克服するイエスの福音とも考えられます。イエスとの出会いは奇跡を産み出します。

(執筆・初出：大井尚・2008年2月)

第23日

マタイによる福音書10：1～15

「行って、『天の国は近づいた』と宣べ伝えなさい」(7節)。イエスが弟子たちを遣わされたときの言葉です。それはイエスが来られるにあたって、神の国の到来を告げる大事な言葉でした。わたしたちも遣わされるときに、この言葉を持っていきたいと思います。それは、救いの本来の内容を告げるからです。それは、神のご支配が近づいたということです。知恵と力に満ちた、愛の支配です。

(執筆・初出：三浦寿夫・2003年9月)

第22日

マタイによる福音書9：27～38

収穫のための働き手が少ないとは昔も今も変わらない状況ですね。この働き手とは、単に牧師とか説教者だけのことでなく、あらゆる奉仕者をも含むと思います。「そんなこと言われても、もうこれ以上奉仕する時間もないし、体力もないし」と嘆く前に本文に注意。イエスはまず「願いなさい」とおっしゃっているのです。祈りなさい、と。働き手をお送りください、わたしもその一人としてお用いください、と祈りましょう。

(執筆・初出：笹山緑・2002年2月)

第24日

マタイによる福音書10：16～33

「しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる」(22節)。信仰生活にもいろいろな逆風が吹きます。逆風のない信仰生活はよほど恵まれた環境にいるか、信仰の戦いを避けているかではないのでしょうか。もちろん苦しみを敢えて求める必要はないでしょう。もし苦難の中にいたら、神を信じて希望をもって忍耐するようにとイエスは教えられます。「最後まで」とは望みを捨てないでということであり、信じてということでしょう。

(執筆・初出：大井尚・2008年2月)

第25日

マタイによる福音書10:34~11:1

「はっきり言うておく。わたしの弟子だという理由で、この小さな者の一人に、冷たい水一杯でも飲ませてくれる人は、必ずその報いを受ける」(42節)。イエスの弟子として生きられるわたしたちは、なんと幸せなのでしょう。一杯の水を飲ませるといふ小さな業でも主は覚えてくださるのですから。隣人に対する奉仕の業は、どんなに小さくても、真実な主への愛の業として行われるなら、主は喜んでくださいます。

(執筆・初出：花房光江・2012年2月)

第27日

マタイによる福音書11:20~30

「わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである」(29~30節)。イエスの下に、重荷をおろしその導きにゆだねるなら、安らぎが与えられる。それがイエスの約束です。イエスの軛を負うということは、自分の知恵にたよる生き方をやめ、イエスという主に従うことです。そこに安息と自由があります。主の愛に感謝しましょう。

(執筆・初出：三浦寿夫・2008年2月)

第26日

マタイによる福音書11:2~19

「あなたがたが認めようとするれば分かることだが」(14節)。預言者によって語られた言葉、それは神の言葉です。神の約束です。そのことは、認める者には大きな力を持ちます。わたしたちは、聖書の御言葉をそのように、受け止めているのでしょうか? 「わたしにつまずかない人は幸いである」(6節)と言われたイエス。イエスにつまずかないということは、人間の力ではなく、神の約束を信じるかどうかにかかっています。

(執筆・初出：三浦寿夫・2008年2月)

第28日

マタイによる福音書12:1~21

「人の子は安息日の主なのである」(8節)。主に反逆する人々は、なんとか主を陥れようと躍起になっています。その中で主は、安息日の真の精神を明らかになさいます。神が求めておられるのは憐れみであり、人々への愛です(サムエル記上15章22節参照)。ファリサイ派の人々のように、勝手に御言葉を曲げて理解をしてはなりません。わたしたちには真理の御霊の助けがあります。御言葉を深く味わい、従いましょう。

(執筆・初出：花房光江・2012年2月)

第29日

マタイによる福音書12：22～37

「人の口からは、心にあふれていることが出て来るのである」(34節)とイエスはおっしゃいました。わたしは善い人なのか、悪い人なのかと考えます。しかし、人間は器であると聖書は語っています。自分が善いか悪いかを考えるよりも、わたしの心が何に支配されているかが問題です。言い換えれば、何を主としているかということです。わたしたちは、イエス・キリストを主としています。言葉はそこから取りだせば良いのです。

(執筆・初出：三浦寿夫・2003年9月)

第31日

マタイによる福音書13：1～17

「しかし、あなたがたの目は見ているから幸いだ。あなたがたの耳は聞いているから幸いだ」(16節)。わたしたちは、キリストによる救いの出来事が成就し、旧約時代の人々が味わえなかった主の恵みの数々を知ることができる幸いな時代に生かされています。聖霊の助けによって、福音の豊かな恵みを求めて歩みましょう。「あなたがたには天の国の秘密を悟ることが許されている」(11節)。

(執筆・初出：花房光江・2012年2月)

第30日

マタイによる福音書12：38～50

「よこしまで神に背いた時代の者たちはしるしを欲しがすが、預言者ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられない」(39節)。旧約聖書のヨナ書を読むと、イエスの伝えたかったことが分かります。そこには人間に対する神の深い愛、御心が記されています。目に見えることがすべてではなく、見えないところに働いておられる神の御手の業は、信仰がなければ分かりません。

(執筆・初出：田名邊義之・2003年10月)

第32日

マタイによる福音書13：18～30

「刈り入れまで、両方とも育つままにしておきなさい」(30節)。良い麦が蒔かれたのに、実ってみると敵の仕業によって毒麦が混ざり共に育っていたという、当時よくあった話です。「刈り入れまで待て」というのが主人の答えでした。「悪に妥協せよ」というものではありません。自分が悪に誘われないように気をつけ、「裁きは主におゆだねせよ」とのすすめです。主の再臨を待ち望みつつ、福音の種を蒔き続けましょう。

(執筆・初出：花房光江・2012年2月)

第33日

マタイによる福音書13:31~43

「どんな種よりも小さいのに、成長するとどの野菜よりも大きくなり、空の鳥が来て枝に巣を作るほどの木になる」(32節)。天の国の始まりは、この世界にとっては、本当に小さな種で気付かないほども知れません。しかしイエス・キリストの福音は、確実に芽を出し、成長して、この世界全体を覆い尽くしてしまうのです。神のこのダイナミックな御業が、今まさに、日毎なされていることに心を躍らされたいと思います。

(執筆・初出：三浦寿夫・2008年2月)

第35日

マタイによる福音書14:1~12

「王は心を痛めたが、・・・ヨハネの首をはねさせた」(9~10節)。ヘロデの洗礼者ヨハネに対する思いはきわめて不明確です。自分に不都合なことを語るのでも捕らえていたし、処刑するつもりでもいたのですが、ヨハネを支持する民衆を恐れてできませんでした。今度は娘からヨハネの首を求められると、心を痛めますが「客の手前」簡単に人の命を奪います。神の言葉が中心にない人の心は、まるで倒れかかった廃屋のようです。

(執筆・初出：高橋竹夫・2012年2月)

第34日

マタイによる福音書13:44~58

「出かけて行って持ち物をすっかり売り払い、それを買う」(46節)。イエスは、天の国は、良い真珠を求める人がそれを見つけたとき、自分の持っているもの全部と引き換えに手に入れるようなものだと言われました。それを求めて止まない者の、それを見いだすときの喜びを教えられました。「キリストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、それらを塵あくと見なしています」(フィリピの信徒への手紙3章8節)。

(執筆・初出：三浦寿夫・2008年2月)

第36日

マタイによる福音書14:13~21

「ここにはパン五つと魚二匹しかありません」(17節)。世の必要に対して、教会が持っているものはいつの時代でもこのような状態です。問題なのは、今あるものが十分か足りないかということではありません。これを主がお用いくださると信じるか、信じないかというその一点に尽きます。からし種一粒でさえ主は用いられます。大切なのは、わずかなものを主は必ず豊かに用いられるという明確な信仰です。

(執筆・初出：高橋竹夫・2012年2月)

第37日

マタイによる福音書14：22～36

「そして、二人が舟に乗り込むと、風は静まった」(32節)。イエスを幽霊と見違えるほど、弟子たちを悩ませた風、波はひどかったのです。わたしたちも日々、激しく迫ってくる罪と戦い、自分の無力を思い知らされています。しかし十字架による救いを成就してくださった主が今、わたしの人生の舟に乗り込んでくださっています。まず、主の御言葉により頼み、その力を体験させていただきましょう。孤独な戦いではありません。

(執筆・初出：花房光江・2008年3月)

第39日

マタイによる福音書15：21～39

イエスのいやしは、多くの人を苦しみ、悲しみ、痛みから解放しました。イエスは御自分を信じ頼ってくる者を信仰によっていやされました。何よりも、いやされた人だけではなく、いやされた人々を見た群衆が、「神を賛美した」(31節)とあります。わたしたちの愛の業も、人々をまことの神への信仰に立ち帰らせるように用いられたいと思います。そこには、神を愛し、すべての人を愛したイエス・キリストの姿があります。

(執筆・初出：田名邊義之・2003年10月)

第38日

マタイによる福音書15：1～20

「口に入るものは人を汚さず、口から出て来るものが人を汚すのである」(11節)。口から入る食物は、体とお財布に相談の上、ふさわしいものをいただいでください。そうするなら罪となる食べ物はありません。しかし、口から出る言葉は別です。ヤコブ書は、口は身体の中で最も罪深い器官であると語っています。言葉の罪は単に人に対するものではなく、ご自身のかたちに人を造られた神を呪う罪であることを知らねばなりません。

(執筆・初出：高橋竹夫・2012年2月)

第40日

マタイによる福音書16：1～12

「よこしまで神に背いた時代の者たちはしるしを欲しがすが、ヨナのしるしのほかに、しるしは与えられない」(4節)。主は当時の人々にヨナ(ヨナ書参照)の例を使って、これから起こる主の十字架と復活の出来事を暗示されたのです。主の十字架の出来事こそ、唯一の天からのしるしです。神の子が、十字架上で、私たち罪人に代わり、神の怒りと罪の呪いを完全に引き受けてくださいました。救いの確かさはここに 있습니다。

(執筆・初出：花房光江・2008年3月)

第41日

マタイによる福音書16：13～20

「あなたはメシア、生ける神の子です」(16節)。ペトロは弟子の中で最も明確に主イエスを救い主と告白しました。そして主はこの告白の上に教会を建てると宣言されました(18節)。しかしペトロの信仰は弱く、大きなつまずきも経験しました。でも主の宣言は取り消されることなくペトロの上にとどまり続けました。捕らえられた主イエスの前で「わたしはその人を知らない」と三度も誓った人間であるにも関わらず、です。

(執筆・初出：高橋竹夫・2012年2月)

第43日

マタイによる福音書17：1～13

「イエスは近づき、彼らに手を触れて言われた。『起きなさい。恐れることはない』」(7節)。受難の告知をされた数日後、主は弟子たちに天的な体験を与えてくださいました。主の御姿が変わり、天からの声が響きました。しかし弟子たちはこのような天的体験にそのまま浸ってはいられません。主に励まされ、主と共に山を下りました。わたしたちも、救われた喜びにとどまることなく、主の手に導かれてこの世で使命に生きるのです。

(執筆・初出：花房光江・2008年3月)

第42日

マタイによる福音書16：21～28

「イエスは振り向いてペトロに言われた。『サタン、引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思っている』」(23節)。サタンは「主を思う心」という、一見人間的に良い感情と思われるものを使って攻撃してきます。神のおじゃまをすることがサタンの働きです。わたしたちの考えや思いで生きてしまう日々ですが、まず、謙虚に御心を尋ね、しもべとして従う生き方ができますように。

(執筆・初出：花房光江・2008年3月)

第44日

マタイによる福音書17：14～27

「もし、からし種一粒ほどの信仰があれば、この山に向かって、『ここから、あそこに移れ』と命じても、そのとおりになる。あなたがたにできないことは何もない」(20節)。てんかんの子を持つ親、無力さを知る弟子たちは現実に押しつぶされて、主を忘れていました。全能の主が共に働かれるのですから、わたしたちにできないことは何もないのです。キリストがすでに山(行く手を阻む罪、障害)を動かしてくださっています。

(執筆・初出：花房光江・2008年3月)

第45日

マタイによる福音書18：1～14

「そのように、これらの小さな者が一人でも滅びることは、あなたがたの天の父の御心ではない」(14節)。小さな者とは誰を指しているのかと考えた時、「あなた自身だ」との主の声を聞きました。そうです。わたしが今あるのはただ、天の父の憐れみでした。日々、自分の傲慢な思い、迷い出た人を探し通せない愛のなさに悩むわたしですが、天の父の御心を確認し、人々に仕える生き方をしたいと願っています。

(執筆・初出：花房光江・2008年3月)

第47日

マタイによる福音書19：1～15

「そのとき、イエスに手を置いて祈っていただくために、人々が子供たちを連れて来た」(13節)。主の祝福を求めて子どもたちを連れてきた人々こそ主をお喜ばせした人々です。イエスを試そうと離婚問題を論じる人々も、子どもをとどめる弟子たちも、神の祝福を軽んじ、自分の正しさを主張しています。わたしたちに必要なのはまず、わたしが神の祝福にあずかること、次に人々を祝福の場へと導く配慮をすることです。

(執筆・初出：花房光江・2008年3月)

第46日

マタイによる福音書18：15～35

「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである」(20節)。教会の集会はどんなに小さな集まりでも単なる人の集まりではなく、中心に神がおられます。神の臨在を覚えて集まり祈りましょう。わたしたちのそれぞれの教会も、はじめはわずかな人が心を合わせて祈るところから出発しました。教会の主は今日も御業を進めておられます。

(執筆・初出：花房光江・2008年3月)

第48日

マタイによる福音書19：16～30

「行って持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい」(21節)。イエスに従うということ。これこそがわたしたちの人生において優先すべき第一のことです。しかし、しばしば富がそれを邪魔します。権力や地位、名誉欲、多忙、無関心なども同様です。残念ながらわたしたちの力ではそれらに打ち勝つことはできません。けれども神にならできます。

(執筆・初出：石坂和久・2012年3月)

第49日

マタイによる福音書20：1～19

「自分のものを自分のしたいようにしては、いけないか。それとも、わたしの気前のよさをねたむのか」(15節)。全ては神のものである。このことをわたしたちが忘れるところに、全ての過ちの原因があるように思います。この体も、時間も、わたしたちが持つ全てのもものは神のものであり、わたしたちはそれをあずかっているにすぎないのです。あなたの今日も神のものです。

(執筆・初出：石坂和久・2012年3月)

第51日

マタイによる福音書21：1～11

「向こうの村へ行きなさい。するとすぐ(中略)子ろばのいるのが見つかる。それをほどいて、わたしのところに引いて来なさい」(2節)。イエスを乗せた名もない小さなろばは、何と幸いだったことでしょう。このろばが他のろばよりも何か優れていたわけではありません。ただイエスが必要とされたときにそこにいたというだけです。わたしたちもいつでも主に用いていただけるように備えていたいものです。

(執筆・初出：品川謙一・2008年3月)

第50日

マタイによる福音書20：20～34

「あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、皆の僕になりなさい」(26～27節)。人に仕えてもらうことを求め合うならば、そこには争いが生まれます。しかし、互いに仕え合うならば、そこにはつながりが生まれます。イエスは仕えられるためではなく、仕えるために来られました(28節)。それは神と人、人と人をつなぐためです。

(執筆・初出：石坂和久・2012年3月)

第52日

マタイによる福音書21：12～27

「イエスは神殿の境内に入り、そこで売り買いをしていた人々を皆追い出し、両替人の台や鳩を売る者の腰掛けを倒された」(12節)。両替も鳩も神殿での礼拝に使うためのものでした。しかしそれらは本来神殿に来る前に準備しておくべきものです。礼拝は全人格的な行為であり、コンビニで買い物をするように片手間ですませるものではありません。わたしたちの礼拝への備えはコンビニ化していないでしょうか。

(執筆・初出：品川謙一・2008年3月)

第53日

マタイによる福音書21：28～46

「神の国はあなたたちから取り上げられ、それにふさわしい実を結ぶ民族に与えられる」（43節）。神はイスラエルの民を選び、ご自分の民として養育されたのですが、彼らが頑なになったので、神の国の福音は異邦人に伝えられました。わたしたちの信仰生活も頑なになっていくことがあります。新しく信仰に導かれた人々から学ぶことも多いものです。いつも謙虚に主から学ぶ者でありたいと思います。

（執筆・初出：品川謙一・2008年3月）

第55日

マタイによる福音書22：23～46

「第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい』（39節）。真実に神を愛する人は、隣人をも愛さなければならないという教えですが、人を愛するためには、まず自分を愛することを学ばなければなりません。自分を嫌いなクリスチャンが多すぎます。それが信仰の一部だと誤解している人もいます。神があなたを愛しておられるのに、なぜあなたは自分を愛さないのですか。

（執筆・初出：高橋竹夫・2003年10月）

第54日

マタイによる福音書22：1～22

「家来たちは通りに出て行き、見かけた人は善人も悪人も皆集めて来た・・・婚礼の礼服を着ていない者が一人いた」（10～11節）。礼服を着ていない者とは悪人のことではありません。善人も悪人も婚礼に招かれたのですから。礼服とは主イエスの十字架の贖いによる義の衣です（ガラテヤの信徒への手紙3章27節）。神の婚礼の席で問われるのは悪人か善人かではなく、主イエスを自分の救い主として受け入れているかどうかです。

（執筆・初出：品川謙一・2008年3月）

第56日

マタイによる福音書23：1～22

「そのすることは、すべて人に見せるためである」（5節）。わたしたちの一つ一つの言動は、一体誰を気にしているのでしょうか。「誰の目を気にしているのか」。わたしたちはこのことを常に問い直す必要があると思います。なぜならわたしたちはすぐ人の目を気にしてしまうからです。確認しましょう。わたしたちが最も気にすべき目は、神の目です。

（執筆・初出：石坂和久・2012年3月）

第57日

マタイによる福音書23：23～39

「このようにあなたたちも、外側は人に正しいように見えながら、内側は偽善と不法で満ちている」(28節)。イエスの鋭い洞察です。わたしたちの信仰生活も外側だけのものになっているかもしれません。内側からわたしたちを変えてくださるのは聖霊なる主の働きです(コリントの信徒への手紙二3章18節)。外面を取り繕うのはやめて、ありのままのわたしを造り変えてくださる聖霊なる主に心を開き導いていただきましょう。

(執筆・初出：品川謙一・2008年3月)

第59日

マタイによる福音書24：15～31

「預言者ダニエルの言った憎むべき破壊者が、聖なる場所に立つのを見たら一読者は悟れ」(15節)。ダニエル書9章27節後半の御言葉が引用されています。神の天使ガブリエルが、預言者ダニエルに示された幻を理解させようとしてしました。今もなお具体的なことは隠されていますが、わたしたちに明確になっていること、それは、イエスが共にいてくださるということです。

(執筆・初出：穂波安孝・2012年3月)

第58日

マタイによる福音書24：1～14

「そして、御国のこの福音はあらゆる民への証しとして、全世界に宣べ伝えられる。それから、終わりが来る」(14節)。この世界にはやがて終わりが来る。これは聖書の基本的なメッセージです。この世の富も名声や権力も終末の日には何の意味もなくなってしまうものです。だとすれば、終末の日に価値をもつ唯一のもの＝御国の福音を人々に宣べ伝えることこそ、わたしたちの一番大切な使命ではないでしょうか。

(執筆・初出：品川謙一・2008年3月)

第60日

マタイによる福音書24：32～51

「天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない」(35節)。天地が滅びると聞くと、ただただ恐ろしいというのが正直な想いではないでしょうか。しかしそのような状態になっても滅びないものがあるとイエスは語っておられます。そうです、イエスが語られた約束は滅びることはないのです。なんと恵み、なんと平安、なんと希望でしょう。

(執筆・初出：穂波安孝・2012年3月)

第61日

マタイによる福音書25：1～13

「だから、目を覚ましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないのだから」(13節)。天地が滅びる日がいつなのかは、神のみがご存知(24章36節参照)ですので、イエスはいろいろなたとえ話をういて、その日に備えるようにと語られています。ここでのたとえ話はいつ油が切れてもいいように、油を準備しておくというたとえ話です。油断とはまさに「油が断たれた状態」をいうのですね。

(執筆・初出：穂波安孝・2012年3月)

第63日

マタイによる福音書25：31～46

「この最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」(40節)。わたしたちは直接神を愛することはできません。また直接仕えることもできません。誰かを愛することが、また誰かに仕えることが主を愛することになり、主に仕えることとなります。「この最も小さい者」が誰かというのは、それはわかりません。自分を愛するようにあなたの隣人を愛しなさいと言われた「あなたの隣人」の中に、主はおられます。

(執筆・初出：高橋竹夫・2008年4月)

第62日

マタイによる福音書25：14～30

「恐ろしくなり、出かけて行って、あなたのタラントンを地の中に隠しておきました」(25節)。この僕は怠け者ではなく、主人のことをある側面からしか見ていなかったために、主人を恐ろしい存在としてとらえてしまい、活発になれなかったのではないのでしょうか。「完全な愛は恐れを締め出します」(ヨハネの手紙一4章18節)。神の愛を間違えて受け取る時に、人間は恐れに支配されてしまいます。

(執筆・初出：穂波安孝・2012年3月)

第64日

マタイによる福音書26：1～16

「一人の女が・・・香油の入った石膏の壺を持って近寄り、・・・イエスの頭に香油を注ぎかけた」(7節)。この出来事は、十字架の福音が証しされるころではどこでも語られる、と主イエスは強調されました。この女性が香油を注ぐことによって、自分のすべてを主に献げたからです。人生のすべてを献げるのが信仰です。人は外側を見ますが、主は人の内側を、すなわち献げた人の心をご覧になります。

(執筆・初出：高橋竹夫・2008年4月)

第65日

マタイによる福音書26：17～30

「これは、罪が赦されるように、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である」(28節)。聖餐のたびにあずかる杯は、十字架で救いが実現したことを主と共に喜ぶ祝宴です。聖餐は、このすばらしい約束を人間に与えようとする主と、その約束を信じて御前に集まった人々との喜びの祝宴です。この祝宴でなお自分の罪を恥じている人がいます。そうではなく、罪赦された者として救いの約束にあずかろうではありませんか。

(執筆・初出：高橋竹夫・2008年4月)

第67日

マタイによる福音書26：47～56

「わたしが父にお願いできないとでも思うのか。お願いすれば、父は十二軍団以上の天使を今すぐ送ってくださるであろう」(53節)。イエスは今すぐにでも、十字架刑への道を回避することができたのです。ご自身の身に起こることをすべて知りながら、すぐにでも避ける手段がありながらも、全人類の罪を、神の前に赦す道をこの世に備えるために、イエスは十字架刑への道を歩いて行かれたのです。

(執筆・初出：穂波安孝・2012年3月)

第66日

マタイによる福音書26：31～46

「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください」(39節)。この杯とは何でしょうか。それは十字架刑による死です。イエスは、これからご自身に起こるすべてのことをご存知でした。ですから、できることならそれを避けさせてくださいと、父なる神に願っておられるのです。このように願いながらも、イエスは神の御心に聴き従っていかれたのです。

(執筆・初出：穂波安孝・2012年3月)

第68日

マタイによる福音書26：57～75

「ペトロは、『鶏が鳴く前に、あなたは・・・』と言われたイエスの言葉を思い出した。そして外に出て、激しく泣いた」(75節)。「たとえ、御一緒に死なねばならなくなっても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません」(35節)と誓ったペトロ。彼はこのときになって初めて自分の弱さに気づき、イエスに従いたくても従うことのできない罪の働きが、自分の心の中にもあることを実感したのではないのでしょうか。

(執筆・初出：穂波安孝・2012年3月)

第69日

マタイによる福音書27：1～10

ユダが銀貨を祭司長や長老たちに返そうとした行為はまことに憐れで愚かです。彼らに罪を告白し銀貨を返し、それで救われ得ると思ったのでしょうか。罪責感で、いてもたってもいられなかったのでしょうか。主の元に駆けつけるべきでした。人間は誰も、なされてしまった取り返しのつかないことを、なかったことにすることはできません。自殺したってだめです。神の前に出ることだけが救いへの道です。

(執筆・初出：笹山緑・2003年11月)

第71日

マタイによる福音書27：27～44

「イエスの頭の上には、『これはユダヤ人の王イエスである』と書いた罪状書きを掲げた」(37節)。ローマの兵士たちには、これは単なる皮肉に過ぎなかったでしょう。彼らにとって、主イエスは、支配下の民族の王となろうとした一人の男に過ぎなかったのですから。でも、わたしたちには違います。主イエスこそ、真の王です。この世においても来るべき世においても、イエスこそわたしの主、わたしの王でいらっしゃいます。

(執筆・初出：大井満・2003年11月)

第70日

マタイによる福音書27：11～26

「この人の血について、わたしには責任がない」(24節)。ピラトはこの一言によって、「使徒信条」に名をとどめることになったと言えるでしょう。主イエスの血の責任は、わたしたち一人一人にあります。わたしたちの罪がイエスを十字架につけました。ピラトのあの言葉は、ピラトが言ったのではなく、わたしが言ったのです。でもイエスは、そのわたしのためにも十字架にかかり、わたしの罪を清めてくださいました。

(執筆・初出：大井満・2003年11月)

第72日

マタイによる福音書27：45～66

「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」(46節)。絶望的状况に置かれて、神に見捨てられたと思う苦しみがあるかもしれません。しかし、わたしたちが本当に神に見捨てられる恐ろしさは、神との永遠の断絶によります。「なぜわたしをお見捨てになったのですか」と本来わたしたちが叫ぶはずの叫びを、主イエスは負ってくださいました。わたしたちが決して見捨てられることのない者とされるために。

(執筆・初出：和泉美和子・2012年4月)

第73日

マタイによる福音書28：1～20

「すると、イエスが行く手に立っていて、『おはよう』と言われた」(9節)。婦人たちは天使から復活の知らせを聞き、弟子たちに告げるよう命じられ、走り出したその先で、イエスに出会いました。婦人たちは与えられた使命に動いたからこそ、行く手にイエスの姿を見ました。使命には本当に自分にできるのか、大丈夫かという不安がつきものです。しかし、主の委ねられた使命に行動をおこす者の前に、主イエスは立ってくださいます。

(執筆・初出：和泉美和子・2012年4月)

第74日

マルコによる福音書1：1～15

「神の子イエス・キリストの福音の初め」（1節）。福音とはよい知らせという意味です。神はわたしたちを交わりの対象として創造されました。しかし人間は神との愛の関係を断ち切ってしまい祝福を失いました。これが罪です。愛の神はキリストをこの世に送って、この罪を赦す道を開き、愛の交わりを回復してくださいました。そして今度はわたしたちを、ご計画に従って、よい知らせを伝える器として用いてくださるのです。

(執筆・初出：花房光江・2012年7月)

第76日

マルコによる福音書1：35～45

「朝早くまだ暗いうちに、イエスは起きて、人里離れた所へ出て行き、そこで祈っておられた」（35節）。

この前後の記述から、主イエスが昼夜を問わず人々をいやすために立ち働かれているような印象があります。わたしたちもそうすべきなのでしょうか。燃え尽きてしまわないのでしょうか。いいえ、大丈夫です。35節の主の姿にその源泉があります。

(執筆・初出：笹山緑・2005年12月)

第75日

マルコによる福音書1：16～34

「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」（17節）。

主イエスの弟子への呼びかけです。「人間をとる漁師」とは何とむずかしくて大変そうな仕事でしょう。しかし、主はまず「わたしについて来なさい」とおっしゃっているのです。

主イエスと共にいることが、何にも代えがたい喜びであり幸いであるのなら、ただ離れず懸命についていけばよいのです。

(執筆・初出：笹山緑・2005年12月)

第77日

マルコによる福音書2：1～17

「四人の男が中風の人を運んできた」（3節）。チームワークによる宣教の働きが、ここに記されています。この四人は、中風の人への愛、主イエスならこの人をいやしてくださるという確信、そしてそのためなら何でもするという熱意と知恵に満ちていました。わたしたちも、伝道の働きを一人で孤独に進めるのではなく、様々な人々と手を組み、祈りを合わせて、チームワークで進めていきましょう。

(執筆・初出：大井満・2018年6月)

第78日

マルコによる福音書2：18～28

「新しいぶどう酒は、新しい革袋に入れるものだ」（22節）。新しいぶどう酒はまだ力強く発酵しているので、古い革袋ではその力に負けて、裂けてしまうのです。主イエスの福音も、力強く働いています。旧約聖書の律法や人間の常識的な考えでは、受けとめることができません。わたしたち自身が新しい革袋とされるように、御言葉と聖霊とによって、造り変えていただきましょう。そして力強い生きた福音を注ぎ出しましょう。

（執筆・初出：大井満・2018年6月）

第80日

マルコによる福音書3：20～35

「神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ」（35節）。

神の家族とは、神の御心を行う人たちのことです。神の御心を行うために、わたしたちは救われ、神の家族とされました。救われて終わりなのではなくて、その先があるということです。救われたことに満足して、そこで立ち止まってはいませんか。御心を行うことを、神はわたしたちに望んでおられます。

（執筆・初出：石坂和久・2015年6月）

第79日

マルコによる福音書3：1～19

「命を救うことか、殺すことか」（4節）。安息日の厳しい戒め、規定を守らなければ自分の正しさを失うという恐れの中での究極の選択。果たしてイエスから発せられたこの問いかけに、わたしたちもちゃんと答えを出せるでしょうか。でも、イエスはそんなわたしたちに、助けを与えてくださいます。メシアである神の御子が、神の御心が何かを教えてくださいます。御心は命を救うことであり、律法は愛を教えている、と。

（執筆・初出：三浦寿夫・2008年10月）

第81日

マルコによる福音書4：1～9

「そして、『聞く耳のある者は聞きなさい』と言われた」（9節）。

「瞬きの詩人」として知られる水野源三さんの詩に「呼ばれています」という詩があります。「呼ばれています いつも、聞こえていますか いつも。はるかなとおい声だから、よい耳を よい耳をもたなければ」。神の御心に聴き従って歩むには、神が自分に何を語ろうとされているのか、その御心を知ろうとする姿勢が何よりも大切です。

（執筆・初出：穂波安孝・2012年7月）

第82日

マルコによる福音書4：10～20

「御言葉を聞いて受け入れる人たちであり」（20節）。神の御言葉は、聞く者には力があります。聞く耳がなければ、種は根を張り実を結ぶことはありません。聞いて受け入れるとき、百倍もの実を結ばせるのです。聞く耳は、神との関係の中に、まさに信仰にあります。「信仰は、キリストの言葉を聞くことによって始まる」とパウロも教えています。わたしの考えがキリストの言葉を押しつけて耳をふさいでいないでしょうか。

(執筆・初出：三浦寿夫・2008年10月)

第84日

マルコによる福音書4：35～41

「イエスは言われた。『なぜ怖がるのか。まだ信じないのか』」（40節）。

イエスさま、そうです。あなたが共にいてくださると分かっているながら、わたしは怖がります。風と波がわたしを飲み込んでしまうような気がするのです。こんな波風の中で、なぜあなたは向こう岸に渡ろうと言われたのだろうかかと疑います。主よ、恐れの中で、風や湖さえあなたに従うのだということを思い出させてください。主よ、信仰を与えてください。

(執筆・初出：三浦寿夫・2008年10月)

第83日

マルコによる福音書4：21～34

「何を聞いているかに注意しなさい。あなたがたは自分の量る秤で量り与えられ、更にたくさん与えられる」（24節）。

神の業の理解は賜物であって、決してわたしたち自身の知力で理解することではないにもかかわらず、主は24節のように訓戒されます。「聞いている」ということが単に「聞こえている」ことではなく、従おうとの意志を持って傾聴することだからです。

(執筆・初出：笹山緑・2005年12月)

第85日

マルコによる福音書5：1～20

神がお一人であるのに対して、悪霊はレギオン「大勢」です（9節）。悪霊は自分が大勢であることを誇っていますが、現実には「分裂」です。大勢であることを誇るの悪霊の働きです。また少数であることを恐れるのも同じです。主イエスはお一人で全人類の救いを成し遂げられました。大勢の悪霊は、ただ一人の神の子に打ち勝つことができませんでした。自分を誇れなくても、わたしたちはただ一人の救い主を誇りましょう。

(執筆・初出：高橋竹夫・2005年12月)

第86日

マルコによる福音書5：21～34

「この方の服にでも触れればいやしていただける」（28節）。どんな治療も無駄だった彼女はあきらめの中にいたはずです。しかし彼女は、イエスなら自分をいやして下さると思いました。イエスから出て行った力は、信じる者を憐れむ愛の力です。主の憐れみは関係の中に働きます。イエスは、群衆の中に「触れた者を見つけようと、辺りを見回しておられた」のです。主はご自身を求める者に必ず心を向けてくださいます。

（執筆・初出：三浦寿夫・2008年10月）

第88日

マルコによる福音書6：1～13

「旅には杖一本のほか何も持たず」（8節）。この旅は人生そのものです。人生が自分のものであり、あれもしたい、これもしたいとなれば、もっといろいろ必要になります。しかし、人生が本来神のものであり、主に従って生きるものであるなら、それほど多くのものはいりません。かえって、物質的に、あるいは知的に多くのものを持つ人は、主イエスの招かれる狭い門に入ることができない場合があります。

（執筆・初出：高橋竹夫・2005年12月）

第87日

マルコによる福音書5：35～43

「少女よ、わたしはあなたに言う。起きなさい」（41節）。「起きなさい」は死からよみがえり、新しい命を与えられることです。主イエスも十字架で死なれましたが、復活されました。わたしたちはそれを信じています。そして、その復活の命を持たれる方が、このわたしにこう言われる日が来るのです。「娘よ（息子よ）、起きなさい」と。キリストを信じるとは、この救いがわたしの救い、わたしの復活であると信じることです。

（執筆・初出：高橋竹夫・2005年12月）

第89日

マルコによる福音書6：14～29

「その教えを聞いて非常に当惑しながら、なお喜んで耳を傾けていた」（20節）。ヘロデの神の言葉を聞く姿勢に何が欠けていたのでしょうか。「当惑しながら」聞いたからでしょうか。初めは誰でもそうです。問題は別にあると思います。「喜んで耳を傾けて」いるだけではいけないのです。「わたしがここにおります。わたしを遣わしてください」（イザヤ6章8節）と立ち上がるのでなければ。

（執筆・初出：高橋竹夫・2005年12月）

第90日

マルコによる福音書6：30～44

「弟子たちは確かめて来て、言った。『五つあります。それに魚が二匹です』」（38節）。

男が五千人に対して、パンが五つと魚が二匹。多くの教会が直面している現実ではないでしょうか。欠けだらけ、足りないものだらけです。けれど主の御心に従おうと、持てるものを主に差し出し委ねるならば、主はそれを祝福して十分に用いてくださいます。

（執筆・初出：石坂和久・2015年6月）

第92日

マルコによる福音書7：1～13

「この民は口先ではわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れている」（6節）。態度と心。これはわたしたちにとって永遠のテーマです。ホセア書6章6節に「わたしが喜ぶのは愛であっていけにえではなく」とあります。献げ物は神をあがめる心から起こされる行為です。しかし、わたしたちはともすると形だけになることがありますね。神を愛する心ですら、主にいただかなければならないですね。祈りましょう。

（執筆・初出：三浦寿夫・2008年10月）

第91日

マルコによる福音書6：45～56

「弟子たちを強いて舟に乗せ、向こう岸のベトサイダへ先に行かせ」（45節）。舟は教会の姿でもあります。「強いて」とは、キリストの弟子には教会が必要であり、主の選びによって教会に招き入れられるということです。そして、その舟に主は共に乗ってくださるのです。逆風の中にあっても「安心しなさい。わたした。恐れることはない」（50節）の声を、舟の中で聞き続けることができます。

（執筆・初出：和泉美和子・新規）

第93日

マルコによる福音書7：14～23

「みだらな行い、盗み、殺意、姦淫、貪欲、悪意、詐欺、好色、ねたみ、悪口、傲慢、無分別など」（21～22節）。わたしたちの心の中にはこういった悪が渦巻いています。主イエスはそんなわたしたちの心の内を知っておられ、そんなわたしたちを愛し、救うために十字架にかかってくださいました。この十字架の愛を受けるとき、わたしたちの心の中からこれらの悪は取り除かれていきます。

（執筆・初出：石坂和久・2008年10月）

第94日

マルコによる福音書7：24～37

病の娘をもつこのギリシア人の女性は、大したものです。多くの人に仕えて、へとへとに疲れ、しばし休もうとしておられた主をたたき起こして、救いの民でもないのに娘のいやしを願い求めます（28節）。何というずうずうしさでしょうか。しかし、その姿が主の心を動かしました。主の目はわたしたちの目とは違います。ただ主に見ていただくために、今日もなり振りかまわず、大胆に、ずうずうしく、主の前に進み出しましょう。

（執筆・初出：高橋竹夫・2005年12月）

第96日

マルコによる福音書8：11～21

「まだ、分からないのか。悟らないのか。心がたたくなくなっているのか」（17節）。五千人、また四千人をわずかなパンで養われた奇跡を経験していながら、弟子たちは主イエスの大事な言葉をそちのけでパンのことに心うばわれていました。主イエスは、何をまだ分からないのかと言われたのでしょうか。それはイエスは何者かということです。主イエスこそ、目を注ぐべき神の子メシアです。まことの命です。

（執筆・初出：三浦寿夫・2012年8月）

第95日

マルコによる福音書8：1～10

四千人の人が空腹でした。誰も彼らを満たすことはできません。人里離れた所で、空腹を満たすものはありません。この状況は人間も場所も空間も、人を霊的に満たすことはできないことを象徴しています。主イエス・キリストによってこそ人間は霊的に満たされるのです。用いられたのは「七つのパン」と少しばかりの「小さい魚」です。人間の量りでは何の役にも立たないように思えます。しかし福音は大きな力となります。

（執筆・初出：大井尚・2006年1月）

第97日

マルコによる福音書8：22～30

「するとイエスは、御自分のことをだれにも話さないようにと弟子たちを戒められた」（30節）。ペトロの信仰の告白に対して、主イエスは、なぜそれを話さないようにと言われたのでしょうか。マルコによる福音書は、十字架を描き出そうとしています。あのゴルゴタの丘の十字架を見、復活の主と出会うまでは、メシアを真に理解することはないからです。主イエスの御業はすべてそこを指し示しています。

（執筆・初出：三浦寿夫・2012年8月）

第98日

マルコによる福音書8：31～9：1

「自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」（34節）。

十字架は命を与える道です。わたしたちは病気になると医者に従います。その病が深刻であればあるほど、自分より医者に身をゆだねます。そのようにわたしたちは、自分から離れて、イエスに身をゆだねるべきです。イエスの御心より、自分の考えを優先させるとき、主は「サタン、引き下がれ」と言われます。これも主の命の言葉です。

（執筆・初出：三浦寿夫・2012年8月）

第100日

マルコによる福音書9：14～32

「信じます。信仰のないわたしをお助けください」（24節）。矛盾したように見えるこの父親の言葉は、わたしたちの信仰をよく表しています。信じるということは人間の可能性の上に成り立つものではないのです。信仰とはすべてをゆだねることです。でも神を信じられないのが人間です。不信仰な罪深いわたしにイエスは呼びかけてくださいます。「わたしにゆだねなさい」と。おゆだねすることが信仰です。

（執筆・初出：大井尚・2006年1月）

第99日

マルコによる福音書9：2～13

「山上の変貌（へんぼう）」と呼ばれている記事です。イエスの神的性質が三人の弟子たちに示されました。ペトロは感動してこのままの状態をとどめたいと申し出ます。しかしそれには主イエスの十字架と復活が必要なのです。そのことを抜きにはありえません。復活するまではだれにも話してはならない（9節）と主が命じられたのはそのためです。罪の贖いなしでの神秘的体験は福音ではありません。

（執筆・初出：大井尚・2006年1月）

第101日

マルコによる福音書9：33～50

「『いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい』（35節）。誰がいちばん偉いかという議論に、イエスはこう答えられました。しかし、偉くなるために仕えるとすれば本来矛盾したことです。主の教えは、この世界の価値観とは反対側にあるように思われます。主の言葉には、この世界と神の支配とが並べて置かれています。神の支配は、信仰によって主に倣うときに見えてくるのです。

（執筆・初出：三浦寿夫・2012年8月）

第102日

マルコによる福音書10：1～16

結婚や離婚の問題をこの聖書の御言葉だけで論じ、結論を出すことはできません。それにしても現代はこの問題を軽く扱っているのではないのでしょうか。形式論的に、また律法的に白か黒かというように決定することは難しい問題です。ただ基本に「神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない」（9節）という信仰を持たなければなりません。喜びや悲しみ、痛みを味わいながら、信仰をもって積極的意義を大切に。

（執筆・初出：三浦寿夫・2012年8月）

第104日

マルコによる福音書10：32～45

わたしたちは信仰において、とんでもない見当違いをしているかもしれません。日本人の宗教心の共通点は人間中心、すなわちわたしたちのために信じるというのが一般的です。イエスは「人の子は仕えられるためではなく仕えるために」（45節）と言われました。わたしたちの信仰はわたしのためではなく、神と人に仕えるためにあるのです。神と人を愛することができるものとなったことを喜び感謝したいですね。

（執筆・初出：大井尚・2006年1月）

第103日

マルコによる福音書10：17～31

「イエスは彼を見つめ、慈しんで言われた」（21節）。

悲しんで立ち去った金持ちの男を、イエスは慈しんで見つめておられました。彼は、神を求めながら神を見ることができなかつたのです。金持ちの男は、主イエスの慈しみの目に神を見いだすべきでした。神を求めつつ彼が見たものは、自分の姿だったので。主よ、いつもあなたを見上げる信仰をお与えください。あなたこそがわたしの救いです。

（執筆・初出：三浦寿夫・2012年8月）

第105日

マルコによる福音書10：46～52

「盲人は上着を脱ぎ捨て、躍り上がってイエスのところに来た」（50節）。

多くの人が叱りつけても、イエス呼び求め続けたバルティマイ。主イエスに呼ばれて、嬉しさのあまり上着を脱ぎ捨て躍り上がって喜んだ彼に、主も喜んで「何をしてほしいのか」と聞かれたに違いありません。本当に嬉しい記事です。主は彼の信仰が彼を救ったと言われました。わたしたちが喜んで近づくなら、主は同じように喜んで聞いてくださいます。

（執筆・初出：三浦寿夫・2012年8月）

第106日

マルコによる福音書11：1～11

「二人が子ろばを連れてイエスのところに戻って来て、・・・イエスはそれにお乗りになった」（7節）。いよいよ時が到来しました。主は軍馬にではなく子ろばに乗り、神に反抗する人間の罪と受けるべき呪いの重荷を黙々と背負って、十字架へと歩まれました。そして、すべての人の救いを成就されたのです。この救いを信じたわたしたちです。日々、子ろばのように主をお乗せして、従順にご用をさせていただけますように。

（執筆・初出：花房光江・2008年11月）

第108日

マルコによる福音書11：20～33

「祈り求めるものはすべて既に得られたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになる」（24節）。なんと確信に満ちた、力強い主のお言葉でしょうか。この祈りは聞かれるだろうか、だめかもしれないなどと思いながら祈るわたしたちに、主イエスは、「すべて既に得られたと信じなさい」とおっしゃいます。祈りへの神の答えは、もう既に与えられているのです。たとえ今はわたしたちの目に見えていなくても、です。

（執筆・初出：大井尚・2006年1月）

第107日

マルコによる福音書11：12～19

「イエスはその木に向かって、『今から後いつまでも、お前から実を食べる者がないように』と言われた」（14節）。

この呪いの言葉を聞いた人たちは、いつもと違うイエスの姿に驚いたでしょうね。これは、盗賊の巣になっている神殿をはじめとして、神の選民の墮落した現状への神の怒りと悲しみの爆発だったのです。しかし主は、全人類が受けるべき神の罰と呪いを十字架上ですべて引き受け、救いの道を開いてくださいました。

（執筆・初出：花房光江・2008年11月）

第109日

マルコによる福音書12：1～12

「まだ一人、愛する息子がいた。『わたしの息子なら敬ってくれるだろう』と言って、最後に息子を送った」（6節）。何度も裏切られながら、最後までわたしたちを信じ、愛する独り子のイエスを送ってくださった父なる神の愛の深さを思います。教会の暦で、クリスマスからイースターまでってすごく期間が短いですね。送られた御子を、あっという間に十字架につけてしまった罪を、暗示しているかのようだと思いますか。

（執筆・初出：大井尚・2006年1月）

第110日

マルコによる福音書12：13～27

「彼らは、イエスの答えに驚き入った」（17節）。今日の段落には、主イエスへの策略にもとづいた質問が二つ記録されています。どちらの質問も、「ところで」（14、20節）という言葉から、彼らの質問の真意が明らかになっていきます。私たちが「ところで」という言葉を、神に対して用いていることはないでしょうか。

「でも」、「しかし」、「そうは言っても」も同じ根っこを持つ言葉ですね。

（執筆・初出：大井満・2006年1月）

第112日

マルコによる福音書13：1～13

「そのときには、教えられることを話せばよい。実は、話すのはあなたがたではなく、聖霊なのだ」（11節）。そのときは、わたしたちが福音を語る時です（10節）。ですから、そのようなときには、まず祈って、すべてを聖霊にゆだねてから語り始めましょう。あかししたい、伝道したい、でもどうやって切り出したら、何を話したらいいのかと思って躊躇している相手はだれですか。祈りつつそのときを待ちましょう。

（執筆・初出：大井満・2006年1月）

第111日

マルコによる福音書12：28～44

「皆は有り余る中から入れたが、この人は、乏しい中から自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れたからである」（44節）。おそらくこの女性は、生活費の全てであるからと自分の献金に自信を持っていたわけではなかったと思います。また逆に、たったこれだけの献金という思いもなかったはずです。誰とも比べることなく、ただ神の前に立って、自由に献げただけです。ここに信仰者の自由を見ます。

（執筆・初出：石坂和久・2012年8月）

第113日

マルコによる福音書13：14～37

「そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る」（26節）。終末の預言は大きな苦難の訪れで終わりません。ダニエル書7章13節のみことば通り、主の再臨の実現がすべての終わりであり、中心です。人間の罪を負って死なれ、復活し、昇天されたキリストが、審判のため、神の国完成のために、栄光の主として来てくださるのです。主人を待つ門番の姿で、再臨の主を待ち望みましょう。

（執筆・初出：花房光江・2008年11月）

第114日

マルコによる福音書14：1～11

「なぜ、この人を困らせるのか。わたしに良いことをしてくれたのだ」（6節）。わたしたちはいつも主のお役に立ちたいと願っていますが、思うようになりません。この女の人も主イエスの埋葬の準備ができるとは思ってもみなかったでしょう。ただ、心にあふれる主への感謝を彼女なりに精一杯表そうとしたのです。わたしたちも豊かに与えられている恵みに対し、感謝を表して生きているでしょうか。

（執筆・初出：花房光江・2008年11月）

第116日

マルコによる福音書14：27～42

「しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように」（36節）。

これぞ祈りです。ですがこの祈りはどういう調子で祈るかによって全く変わってきます。あきらめを込めて祈るのであれば、それはイエスの祈りとは違います。主イエスはこの祈りを完全な信頼を込めて祈りました。なぜなら神の愛を確信していたからです。あなたはどのような調子でこの祈りを祈りますか。

（執筆・初出：石坂和久・2012年8月）

第115日

マルコによる福音書14：12～26

「イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えて言われた。『取りなさい。これはわたしの体である』」（22節）。主の晩餐、聖餐の起源となった、主イエスと弟子たちの食事のシーンです。パンはもちろん主が言われたとおり、主イエスの体を意味しています。しかし、それは単に十字架で裂かれた体であるだけでなく、わたしたちが信仰によってひとつである共同体の一員であることをも意味しています。

（執筆・初出：大井満・2006年1月）

第117日

マルコによる福音書14：43～52

「弟子たちは皆、イエスを見捨てて逃げてしまった」（50節）。ユダだけが裏切り者だったわけではありません。ペトロだけが主を知らないと言ったわけではありません。弟子たちの姿はわたしの姿でもあると感じます。そんなわたしなのに、主はわたしを受け入れ、わたしに語りかけ、わたしを励ましてくださいます。失敗だらけのわたしが立ち上がって先に進めるのは、主の慈しみの御手がわたしをつかみ、導いてくださるからです。

（執筆・初出：花房光江・2008年11月）

第118日

マルコによる福音書14:53~72

「すると、ペトロは呪いの言葉さえ口にしながら、『あなたがたの言っているそんな人は知らない』と誓い始めた」(71節)。

かつての言葉が空しく響きます。「たとえ、御一緒に死なねばならなくなっても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません」(31節)。これがわたしたちの限界であり現実です。けれどイエスはこんなわたしたちを愛し、赦してくださいました。驚くべき愛です。

(執筆・初出：石坂和久・2012年8月)

第120日

マルコによる福音書15:16~32

「『他人は救ったのに、自分は救えない。メシア、イスラエルの王、今すぐ十字架から降りるがいい。それを見たら信じてやろう』」(31~32節)。

主は十字架から降りようと思えば降りることができました。けれど、ここまで人々から侮辱されても、主イエスは十字架から降りることはなさらなかったのです。なぜそうされなかったのでしょうか。わたしたちを愛しておられるからです。

(執筆・初出：石坂和久・2012年8月)

第119日

マルコによる福音書15:1~15

「ピラトは群衆を満足させようと思って、バラバを釈放した。そして、イエスを鞭打ってから、十字架につけるために引き渡した」(15節)。私たち一人一人が、だれの方を向いて生きているのか、ということが問われる文章です。神か人かです。人の方を向いて生きているとき、神は見えませんし、神を愛することもできません。でも神の方を向いて生きているとき、神の目を通して人を正しく見ることができ、愛することができます。

(執筆・初出：大井満・2006年1月)

第121日

マルコによる福音書15:33~47

「『本当に、この人は神の子だった』」(39節)と言ったのは十字架のそばにいた百人隊長で、その様子を見守っていたのは女性たちです。他の弟子たちは逃げ、この場面には出てきません。ここに立ち会わずして何が弟子だ、と客観的には言えるかもしれませんが、人はときにその背中を神に向けてしまうのです。しかし、神の子のまなぎしはちゃんとその人を捉えています。背を向けたとしても、振り返ればそのまなぎしに出会えます。

(執筆・初出：和泉美和子・2012年9月)

第122日

マルコによる福音書16：1～8

「あの方は復活なさって、ここにはおられない」（6節）。死が全ての終わりではない、すなわち、復活があるとは誰が信じることができたでしょう。わたしたちも「ここ」（死）にこだわり、それ以上は考えられません。すなわち、神との断絶という世界以上には出られないのです。しかし、主イエスは復活されました。新しい世界が開かれたのです。主イエスは死を克服する新しい命のある世界への道を開かれました。

（執筆・初出：大井尚・2008年11月）

第123日

マルコによる福音書16：9～20

弟子たちは主イエスの復活の知らせを聞いても信じませんでした。彼らの前に現れた主はその不信仰をとがめ、信じる者に伴うしるしについて「彼らはわたしの名によって悪霊を追い出し、新しい言葉を語る」（17節）と言われました。背中を向けて逃げた弟子たちは、自分の情けなさを嘆いていたでしょう。自分を見つめるだけでは嘆きやため息しか出てきませんが、復活の主を見つめるなら、希望の言葉が新しくあふれ出すのです。

（執筆・初出：和泉美和子・2012年9月）

第124日

ルカによる福音書1：1～25

「彼はエリヤの霊と力で主に先立って行き、・・・準備のできた民を主のために用意する」（17節）。御子イエスは洗礼者ヨハネのことを預言者以上の者であると言われました。民を神に立ち返らせ、メシア（キリスト）の到来に先立って、準備に遣わされたエリヤ的存在でした。ここにも神の救いのご計画があることを思います。約束によってわたしたちに与えられたメシアのために準備の使命をおびて誕生したのが、ヨハネでした。

（執筆・初出：三浦寿夫・2010年11月）

第126日

ルカによる福音書1：39～56

「わたしたちの先祖におっしゃったとおり、アブラハムとその子孫に対してとこしえに」（55節）。ここに主の約束が成就する喜びが歌われています。主はとこしえの約束として、愛する者に憐れみを注がれます。主の御業は、マリアという名もない女性に対してなされました。しかし、そこにこそメシア・イエスの本質が現れていると言えるでしょう。わたしたち貧しいものを富ませられる希望のメシアです。

（執筆・初出：三浦寿夫・2010年11月）

第125日

ルカによる福音書1：26～38

「マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ」（29節）。御子イエスの誕生という人類最大の喜びを告げられた母マリアの最初の反応は、戸惑いでした。それは予想もしなかったことで、人間の視点からすればとんでもないことだったからです。わたしたちも神がなさることに戸惑い「なぜですか」と問いかけることがあります。そんな時、人類最大の喜びを与えられたマリアのことを思い出しましょう。

（執筆・初出：品川謙一・2008年12月）

第127日

ルカによる福音書1：57～80

「主は我らの先祖を憐れみ、その聖なる契約を覚えていてくださる」（72節）。人間が忘れることはあっても、神が約束を忘れることはありません。人間の目から見て挫折したように見えても、必ず主の御言葉は実を結び実現するのです。アブラハムに約束された祝福の源としての役割は、今わたしたちが引き継いでいます。いつも喜び、絶えず祈り、すべてのことに感謝しながら、主の愛を伝えていきましょう。

（執筆・初出：品川謙一・2008年12月）

第128日

ルカによる福音書2：1～21

神が人間の歴史の中に来られた降誕の出来事は、全人類への驚くべき良い知らせであり、大きな喜びの出来事でした

(10節)。しかしこのことは、人々が気付かないほど静かに起こりました。その知らせを受けて御子を拝した者たちは王でも、宗教家たちでもなく、羊飼いだっただけです。神は人間の力や、智恵を退けて人間の考えられないかたちで救いを成就されました。わたしたちもこの福音を神の導きの下で伝えましょう。

(執筆・初出：花房光江・2001年12月)

第130日

ルカによる福音書2：41～52

「母はこれらのことをすべて心に納めていた」(51節)。「わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか」と少年イエスが言われたことを両親は理解できませんでした。聖書のことばが理解できないとき、大切なのはマリアのように「すべて心に納めて」おくことです。理解できなくても、信じることはできます。わからないことがつまずきになるとしたら、その人の信仰はまだ自己中心的です。

(執筆・初出：高橋竹夫・2009年9月)

第129日

ルカによる福音書2：22～40

まだ赤ちゃんであるイエスを連れて、両親はエルサレム神殿に律法に定められたことを行うために行きました。そこでシメオンと女預言者アンナとの祝福を受けられます。二人の語ったことは共通しています。すなわちこの方は救い主であるということです。そして神がこの方をお遣わしになったということです。誕生につづく記事で一貫していることは、イエスがメシアであり、神のご計画が行われているということです。

(執筆・初出：大井尚・2003年4月)

第131日

ルカによる福音書3：1～20

「わたしは、その方の履物のひもを解く値打ちもない」(16節)。洗礼者ヨハネは来るべきメシア・イエスと自分の違いを自覚していました。彼は水による洗礼を授けましたが、それは人間の悔い改めの洗礼であり、救いのための準備の洗礼でした。その意味で、洗礼者ヨハネは旧約最後の預言者でした。それに対し、イエスはまことのメシアであり、わたしたちに罪の赦しと永遠の命をお与えになりました。聖霊は主との交わりの証です。

(執筆・初出：三浦寿夫・2010年11月)

第132日

ルカによる福音書3：21～38

「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」（22節）。罪なき神の子が洗礼を受けられたとき、この声が天から聞こえました。このイエスが受けられたのと同じ洗礼をわたしたちも受けました。洗礼はそれまでの罪が赦されるためだけに受けるものではありません。洗礼を受けた者がいつまでも「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」とされるためです。まことに恐れ多いことですが、これが洗礼の恵みなのです。

(執筆・初出：高橋竹夫・2018年9月)

第134日

ルカによる福音書4：14～30

「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」（21節）。心躍る言葉ですね。「耳にした」とは、聞いてしっかり心に受け止めることです。聖書の言葉を耳にした者は、「そのうち」とか「いつか」という希望ではなく、すでにそれは叶ったという確信に生きることが出来ます。目に見えることで一喜一憂しがちなわたしたちですが、信仰によって生きる特権を与えられていることは大きな恵みです。

(執筆・初出：和泉美和子・2010年11月)

第133日

ルカによる福音書4：1～13

「更に、悪魔はイエスを高く引き上げ、一瞬のうちに世界のすべての国々を見た」（5節）。誘惑とはわかりやすい墮落への誘い、とばかりは限りません。あなたの向上心をさえ悪魔は巧みに利用します。「もうちょっと頑張ってみたら」、「あなたはその程度の人ではないでしょう」。ちょっと待って。動機と目的を見直してみましょう。あなたの心は根っここのところで「御心ならば」と神の方角を向いているでしょうか。

(執筆・初出：笹山緑・2005年4月)

第135日

ルカによる福音書4：31～44

イエスの福音が悪霊を追いだし、多くの人々の病気がいやされました。「自分たちから離れて行かないように」（42節）と人々はイエスを引き止めます。イエスを自分たちだけのものにしたいという気持ちです。「ほかの町にも・・・告知らせなければならぬ」。自分の町、自分の教会だけのことを考えるのではなく、他の町、他の国、他の民族にも福音を伝えるように用いられなければならないのです。

(執筆・初出：大井尚・2003年4月)

第136日

ルカによる福音書5：1～16

「夜通し苦勞しましたが、何もとれませんでした」（5節）。伝道の不振が今日のわたしたちの大きな嘆きであり、課題です。確かにわたしたちは苦勞しています。「しかし、お言葉ですから」。

「しかし」という転換が必要です。自分の（人間の）力や努力に心をとらわれるのではなく、「御言葉」に聞くこと、従うことです。「御言葉」に力があるのです。わたしたちの伝道の能力や知識ではなく「御言葉」に従い、語るのです。

（執筆・初出：大井尚・2003年4月）

第138日

ルカによる福音書5：27～39

「罪人を招いて悔い改めさせるためである」（32節）。なんとという恵みでしょうか。ここに神の恵みの御心があります。イエスは、罪人とされていたレビの家で罪人と共に食事をされました。それは、罪人を招き、悔い改めさせるためでした。わたしたちはすべて神の前に罪人です。主はわたしたちが主に立ち帰って、生きるようになることを望んでおられます。イエス・キリストは、そのために十字架に死なれました。

（執筆・初出：三浦寿夫・2009年9月）

第137日

ルカによる福音書5：17～26

「イエスはその人たちの信仰を見て、『人よ、あなたの罪は赦された』と言われた」（20節）。病気の友をイエスに癒していただきたいと願った友人たちの行動は、一般的にはひんしゆくを買うようなものでした。しかし主イエスは彼らの信仰を賞賛されました。主イエスの目は、この世の人の目とは違うのです。主イエスをご覧になったようにわたしたちも世界を見、隣人を見ることができますように。

（執筆・初出：高橋竹夫・2009年9月）

第139日

ルカによる福音書6：1～11

「あなたたちに尋ねたい。安息日に律法で許されているのは、善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、滅ぼすことか」（9節）。自分は律法学者やファリサイ派ではないと思いたいですが、時々「〇〇すべき、こうあるべき」という思いに捉えられて、自分や他人をも苦しめてしまうことがあります。そんなとき、イエスが「それは愛から出ているのか」と問いかけてくる気がします。イエスの行為はすべて愛から出ています。

（執筆・初出：和泉美和子・2010年11月）

第140日

ルカによる福音書6：12～36

20節から23節には神の国に生きる人々の歩みが人間の思いとは全く違うことが示されています。27節からの生き方も、わたしたちには無理と退けてしまっても良いのでしょうか。いいえ、神がわたしたちを救い、弟子としてくださいました。日々、自分の貧しさ、罪の姿に泣くわたしたちであっても、わたしたちには助け手として聖霊が共にいてくださるのです。愛する主の御心を知り、神の国と義を求めていきましょう。

(執筆・初出：花房光江・2003年4月)

第142日

ルカによる福音書7：1～17

「イエスのことを聞いた百人隊長は、ユダヤ人の長老たちを使いに来て、部下を助けに来てくださるように頼んだ」(3節)。ユダヤ人の長老たちがローマ人の百人隊長のため、それも彼の部下の病気の癒しのためにイエスのもとに行って熱心をお願いします。ここに出てくる人たちはみんな他人のために動いています。他人のための執り成しの祈りの姿、これはまさしく教会の姿です。この姿を主は喜ばれます。

(執筆・初出：和泉美和子・2010年11月)

第141日

ルカによる福音書6：37～49

「わたしを『主よ、主よ』と呼びながら、なぜわたしの言うことを行わないのか」(46節)。僕は主人の言う通り動くのが仕事。わたしたちにこの単純なことがなぜむずかしいのでしょうか。「わたしにはわたしのやり方がある、わたしのタイミングがある、それはわたしのタイプじゃない」。プライドが高くて自分を捨てられないのです。でも、川の水がいつ押し寄せて来るのか誰も知りません。聖書は迫っていると断言します。

(執筆・初出：笹山緑・2005年4月)

第143日

ルカによる福音書7：18～35

「わたしにつまずかない人は幸いである」(23節)。自分の思い描いているものとはかけ離れた状況に遭遇すると、他人や主の御心に対して不満を爆発させることがあるのではないのでしょうか。人間とはそういう弱い者です。自分の期待通りかどうかではなく、主がなさることにひたすら期待するならば、わたしたちの思いをはるかに超えた主の幸いを味わうことができるのです。

(執筆・初出：和泉美和子・2010年11月)

第144日

ルカによる福音書7：36～50

「赦されることの少ない者は、愛することも少ない」（47節）。聖書の中の最も重要な掟は、心を尽くして主なる神を愛することと、同様に隣人を愛することだと主イエスは語られました（マタイ22章34節～）。愛することが信仰の目標です。ところが、どんなに愛そうとしても愛せないときがあります。罪の赦しを豊かに受けていないと、愛する力が出てきません。愛せなかったときに、このことに気付く人は幸いです。

（執筆・初出：高橋竹夫・2005年4月）

第146日

ルカによる福音書8：16～21

「わたしの母、わたしの兄弟とは、神の言葉を聞いて行なう人たちのことである」（21節）。主イエスを中心とする神の家族の一員となるためには、御言葉を学ぶだけでなく、御言葉を行なう必要があります。御言葉を学ぶことは多少はできるが、行なうことはむずかしいと思っている人がいます。むろんけって簡単ではありませんが、はらはらどきどきわくわくして楽しいのは、むしろ御言葉を行なうときです。

（執筆・初出：高橋竹夫・2005年4月）

第145日

ルカによる福音書8：1～15

「十二人も一緒だった」（1節）。「多くの婦人たちも一緒であった」（3節）。宣教の旅を続けられる主イエスに、弟子たちをはじめ多くの人々が同行しました。この旅を一緒に続けるために、特に婦人たちは自分の持ち物を献げて奉仕していたのです。教会の宣教の働きも、またわたしたちの証しも、一人ではできません。「一緒」に歩む多くの人たちが必要です。宣教の歩みを、あなたも「一緒」に始めましょう。

（執筆・初出：大井満・2010年12月）

第147日

ルカによる福音書8：22～39

「先生、先生、おぼれそうです」（24節）。イエスが風と波をお叱りになり、静まったときに、「あなたがたの信仰はどこにあるのか」と尋ねられました。本当にそうですね。イエスが共におられるのに、イエスを忘れてすぐ目の前の事柄に、右往左往するわたしたちです。しかし主よ、あなたは、必ず助けてくださいます。風や波の中で、あなたの御力に信頼します。あなたは、わたしたちの声を聞いていてくださいます。

（執筆・初出：三浦寿夫・2009年9月）

第148日

ルカによる福音書8：40～56

主イエスは、ヤイロにも、病気で苦しんできた女にも誠実に対応され、奇跡を行われました。この出来事からわたしたちは、主イエスが二人に対して違った接し方をなさり、その人とかかわりと信仰の成長を大切にされている様子を知ります。わたしたちの祈りにおいても同じです。祈りが単に求めが応えられた体験や感謝で終わらず、主との交わりが深められ、信仰が成長させられることを願い、主の御心を求めて祈りましょう。

(執筆・初出：花房光江・2003年4月)

第150日

ルカによる福音書9：10～27

「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」（13節）。主イエスはベトサイダに退かれました。しかし、そこまで追いかけてくる魂に飢え渴きを覚えている人々を見て、主は彼らを「迎え」（11節）、御言葉を語ってくださるのです。弟子たちへの冒頭の命令は、イエスの群衆に対する憐れみの態度と一体です。イエスの心をわたしの心とし、命じられなくても、彼らのために奉仕できるようになりたいと思います。

(執筆・初出：大井満・2010年12月)

第149日

ルカによる福音書9：1～9

「旅には何も持って行ってはならない」（3節）。これは、十二弟子を遣わされるときに、イエスがお命じになられたことです。旅をするのなら、何を持って行こうか、何をを用意しようかとあれこれ考え、大荷物になってしまいます。しかし福音の宣教に持って行くものは、神の権威です。それだけ。しかしむしろそこに、神の国を宣べ伝えるわたしたちと共に働かれる神の御力を経験することになるでしょう。主よ、遣わしてください。

(執筆・初出：三浦寿夫・2009年9月)

第151日

ルカによる福音書9：28～36

「これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け」（35節）。イエス・キリストに聞いていますか。自分の望みではなく、イエス・キリストの望みに耳を傾けていますか。イエス・キリストはこう言われました。「人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさい」（ルカによる福音書6章31節）。自分にではなく隣人に仕えていくということ。これこそがイエス・キリストの望みです。

(執筆・初出：石坂和久・2009年10月)

第152日

ルカによる福音書9：37～45

「彼らには理解できないように隠されていたのである」（45節）。何度もキリストの十字架の死がご自身の口から予告されながら、弟子たちはそれを理解できませんでしたが、彼らを責めるべきではありません。いや、それどころか、十字架につけられるために捕らえられた主を彼らが見捨てて逃げ出してしまったことについても、実は一度も責められていないのです。大切なのは十字架の救いをどこまでも信じる信仰です。

（執筆・初出：高橋竹夫・2005年4月）

第154日

ルカによる福音書10：1～16

「行きなさい。わたしはあなたがたを遣わす。それは、狼の群れに小羊を送り込むようなものだ」（3節）。なぜ主はそのようなところに弟子たちを送られたのでしょうか。それは、やがて主が天にお帰りになった後に、弟子たちが、そしてわたしたちが、その使命を担わなければならないからです。わたしたちは主の弟子としての覚悟が必要ですが、いつもわたしたちと共にいてくださる主のご臨在の恵みがあります。

（執筆・初出：大井満・2010年12月）

第153日

ルカによる福音書9：46～62

「弟子たちの間で、自分たちのうちだれがいちばん偉いかという議論が起きた」（46節）。自分と人を比較することからわたしたちは中々抜け出せません。そして人よりも自分が上だと感じれば優越感を感じ、下だと感じれば劣等感を感じます。この不毛な比較の泥沼から抜け出す道があります。それは自分の本当の価値を知ることです。わたしたちの本当の価値、それは人との比較ではなく神からの評価です。

（執筆・初出：石坂和久・2009年10月）

第155日

ルカによる福音書10：17～24

「むしろ、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい」（20節）。

病気が癒されること、悩みが解決されること、これらは確かに喜びです。ですがわたしたちの最大の喜びは、自分の名前が天に書き記されていること、すなわち救われ、天の御国に入ることが約束されていることです。この喜びを見失わないようにしたいですね。

（執筆・初出：石坂和久・2009年10月）

第156日

ルカによる福音書10：25～42

「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか」（25節）。善いサマリア人のたとえはこの律法学者の問いをきっかけにして語られました。彼の質問（もともと主イエスを試そうという意図のものですが）には、根本的な誤りがあります。「何をしたら」という条件を彼は尋ねているのです。永遠の命は、わたしたちのわざによって得られるものではなく、御子の十字架の血の贖いによる贈り物なのです。

（執筆・初出：大井満・2010年12月）

第158日

ルカによる福音書11：14～28

「汚れた霊は・・・『出て来たわが家に戻ろう』と言う」（24節）。主の恵みでわたしたちは救われ、悪霊から解放されましたが、心の王座にキリストがおられますか。このたとえは、救われたからと心を空っぽにしておく、再び悪霊が戻ってくるとの警告です。

「あなたがたの心の内にキリストを住まわせ・・・、愛にしっかりと立つ者としてくださるように」（エフェソの信徒への手紙3章17節）。

（執筆・初出：花房光江・2010年12月）

第157日

ルカによる福音書11：1～13

「求めなさい。そうすれば、与えられる」（9節）。恵みに満ちたイエスのお言葉です。欲しいものは何でも、ということではなく、本当に必要としているもの、欠けているものという文脈の中でのことです。神はわたしが思う以上のものをくださいます。信仰は最大の欠けをわたしに教えてくれます。それは神との交わりです。「祈り」はその交わりの実現です。「祈り」は、門を開いてくれます。

（執筆・初出：大井尚・2005年5月）

第159日

ルカによる福音書11：29～36

「あなたの中にある光が消えていないか調べなさい」（35節）。ともしびがなければ物事を識別することはできません。今日の人類社会は暗やみが支配しています。しかし人間はそれに気付いていませんし、判断できなくなっています。わたしたちの中にある光は消えていないでしょうか。わたしたちは罪に支配されていますので光が消えているのです。ニネベの人々はヨナの説教を聞いて悔い改めました。今必要なのは信仰です。

（執筆・初出：大井尚・2005年5月）

第160日

ルカによる福音書11：37～54

イエスは当時の宗教の専門家たち（ここではファリサイ派の人たちや律法学者たち）を非難しておられます。しかしそれは他人事ではありません。わたしたちの信仰はどうでしょうか。外側ばかりを気にしたり、他者への批判、要求はきびしいのですが、わたしは大丈夫でしょうか。「正義の実行と神への愛はおろそかにしている」（42節）と自分の信仰を問わなければなりません。信仰は何よりも神を愛することです。

（執筆・初出：大井尚・2005年5月）

第162日

ルカによる福音書12：13～21

「有り余るほど物を持っていても、人の命は財産によってどうすることもできないからである」（15節）。

あなたは人生において何が最も重要だと考えていますか。ときにわたしたちは、財産を得ることにとらわれてしまいます。しかし財産はわたしたちの命をどうこうすることはできません。自分のために富を積むのではなく、神の前に豊かになる生き方を求めていきたいですね。

（執筆・初出：石坂和久・2009年10月）

第161日

ルカによる福音書12：1～12

「友人であるあなたがたに言うておく。体を殺しても、その後、それ以上何もできない者どもを恐れてはならない」（4節）。誰の目を気にして生きていますか。人の目ですか。それとも神の目ですか。わたしたちが本当に気にすべきは神の目ですよね。そしてイエスはわたしたちを友人と呼んでくださっています。ここにわたしたちの自由があります。ここにわたしたちの喜びがあります。

（執筆・初出：石坂和久・2009年10月）

第163日

ルカによる福音書12：22～34

「小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる」（32節）。思い煩いと、恐れに満ちていた弟子たちへのこの約束は、ペンテコステの日に事実となりました。それに続く同じ聖霊時代に生きるわたしたちも、今日までの歩みで、聖霊の数々の御業を見せていただけてきました。自分たちの足りなさ、不自由さ、無力さに注がれている目を、いま新たに、神と聖霊の働きに高く挙げ、神ご自身に期待しましょう。

（執筆・初出：花房光江・2010年12月）

第164日

ルカによる福音書12：35～48

「主人が婚宴から帰って来て戸をたたくとき、すぐに開けようと待っている人のようにしていなさい」（36節）。これは、主の再臨を待ち望みつつ歩んでいるわたしたちが、日々、持ち続けていなければならない大切な信仰姿勢そのものです。主人の足音、声を聞き漏らすことがないようにつとめるしもべのように、礼拝も、日々の祈りにも、良く準備して、御前に進み出て、御言葉に聞き従い、忠実に生きていきたいと思えます。

（執筆・初出：花房光江・2009年10月）

第166日

ルカによる福音書13：1～9

「今年もこのままにしておいてください・・・来年は実がなるかもしれません」（8～9節）。この園丁は、実を結ばないわたしたちのためにとりなしておられる主イエスをあらわしています。神の御心は、神のいのちをいただいたわたしたちが、豊かに実を結ぶ生き方をすることです。わたしたちのためにとりなしてくださっている主イエスを思い、真実な悔い改め（方向転換）から、新たな一步を踏み出しましょう。

（執筆・初出：花房光江・2010年12月）

第165日

ルカによる福音書12：49～59

「あなたがたは、わたしが地上に平和をもたらすために来たと思うのか。そうではない。言うておくが、むしろ分裂だ」（51節）。信仰生活を続けるわたしたちは、この世で、信仰のゆえに様々な反対や迫害に出会います。しかしこの分裂はほんとうの平和への第一歩です。キリストがすでに十字架という御業でもたらしてくださった神と人との真の平和が、神によって、実現されます（エフェソの信徒への手紙2章14～16節）。

（執筆・初出：花房光江・2009年10月）

第167日

ルカによる福音書13：10～21

「ところが会堂長は、イエスが安息日に病人をいやされたことに腹を立て、群衆に言った。『・・・安息日はいけない』」（14節）。この会堂長の言葉は当時の人々としては当然の主張でした。しかし、愛の心を失った正しさは、神の正しさとは違います。18年間も苦しめられていた女に接する主の愛の心と、腹を立てていた会堂長の心は対照的です。わたしたちも、愛の心を失って、人を見て裁いたり、怒ったりしていませんか。

（執筆・初出：花房光江・2018年10月）

第168日

ルカによる福音書13：22～35

「狭い戸口から入るように努めなさい」（24節）。神の前に罪人である人間は、自分の力で救いに入ることはできません。そこでイエスは、罪のない神の子であられるのに、十字架上で罪人としていっさいの罰を一身に受け、救いの道を開いてくださいました。しかし、今の世に生きる人々には狭く感じるのでしょうか。「主人が・・・戸を閉めてしまってから」（25節）では遅いのです。今、神の招きを受け入れましょう。

（執筆・初出：花房光江・2010年12月）

第170日

ルカによる福音書14：15～24

「言っておくが、あの招かれた人たちの中で、わたしの食事を味わう者は一人もいない」（24節）。主が盛大なもてなしを用意して招いたのに、人々は目の前の自分たちの用事で断ったのです。主の嘆きが響いてきます。わたしたちは今、この世に生きる日々、天における祝宴へと続く、神との幸いな交わりへと招かれています。礼拝、祈りのときに喜んで出て、存分に神のもてなしを受けて祝福を満喫させていただきましょう。

（執筆・初出：花房光江・2009年10月）

第169日

ルカによる福音書14：1～14

「正しい者たちが復活するとき、あなたは報われる」（14節）。人々はこの世の中で報いを求めて上座に着くことや誰を招くかなどに多くの気を遣っています。しかし、わたしたちの目標は復活の朝、主の前に立つことです。わたしたちの最大の関心事は、恵みにより救われた感謝を日々の生き方において、どう表したらよいのかということです。そのようなわたしたちに報いが用意されているとは何という主の愛でしょう。

（執筆・初出：花房光江・2010年12月）

第171日

ルカによる福音書14：25～35

「自分の十字架を背負ってついて来る者でなければ、だれであれ、わたしの弟子ではありえない」（27節）。とてもわたしなどと尻込みする必要はありません。主イエスはわたしたち罪人の身代わりになって、救いの道を開いてくださった方です。その主が「わたしに従いなさい」と招いておられるのです。すべてをゆだねて（主のくびきを負い）ついて行けばよいのです。どんなに重い十字架でも主の助けによれば軽いからです。

（執筆・初出：花房光江・2010年12月）

第172日

ルカによる福音書15：1～10

「悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある」（7節）。福音を理解できないファリサイ派の人々や、律法学者には一人の悔い改めを喜ぶ天の喜びなどは理解できません。しかしわたしたちは、教会に導かれた人々が、洗礼へと導かれる課程での聖霊の働き、神の御業をはっきり見せていただいています。そして天の喜びに共にあずかる幸いを知っています。

（執筆・初出：花房光江・2009年10月）

第174日

ルカによる福音書16：1～13

「だから、不正にまみれた富について忠実でなければ、だれがあなたがたに本当に価値あるものを任せるだろうか」

（11節）。「不正なやり方でこの世で生きよ」というすすめではありません。世の人が自分が生きのびるために一生懸命な姿を取り上げて、光の子はそれ以上であれと言われているのです。わたしたちが神から任せられているものは、本当に価値あるものだからです。忠実な管理人として忠実に生きたいと願います。

（執筆・初出：花房光江・2009年10月）

第173日

ルカによる福音書15：11～32

「父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した」（20節）。父は息子がおわびをする前に、もうすでに彼を受け入れていました。息子が立ち上がって家路に向かったそのときから。この大きな愛が息子の悔い改めの告白を、自分で考えていた以上に深く真実なものへと導いています。わたしたちは、ただ立ち上がって、父なる神の方向へ歩み出せばよいのです。

（執筆・初出：笹山緑・2011年1月）

第175日

ルカによる福音書16：14～31

「もし、モーセと預言者に耳を傾けないのなら、たとえ死者の中から生き返る者があっても、その言うことを聞き入れはしないだろう」（31節）。この金持ちは生前ラザロを見ていたのでしょうか。彼が何を必要とし、何を感じ、何を求めて生きていたのか、関心を持ったことが一度としてあったのでしょうか。自分の周りの風景の一部としてしか目に入らない隣人が、あなたにはいませんか。御言葉を生きることが求められています。

（執筆・初出：笹山緑・2011年1月）

第176日

ルカによる福音書17：1～10

「つまずきは避けられない。だが、それをもたらす者は不幸である」（1節）。わたしたち自身が、いろいろなことでつまずきやすい存在です。しかしもっと恐れることは、わたしが人をつまづかせることです。主の赦しと助けを求めるのみです。また、わたしたちは、罪を犯した兄弟に対して、戒めて悔い改めに導くことを願い求めているのでしょうか。尊い血で贖われた神の教会の交わりの中で仕えるわたしでありたいと願います。

（執筆・初出：花房光江・2009年10月）

第178日

ルカによる福音書17：20～37

神の国はいつ来るのか。人々は「いつ」つまり時間に関心がありますが、イエスは「いつ」でも大丈夫なように準備する信仰が大切だと語りました。「二人の女が一緒に白をひいていれば、一人は連れて行かれ、他の一人は残される」

（35節）。見た目は同じ環境、条件であっても、ある時、天国と地獄に分けられる現実を迎えるのです。十字架の下にひれ伏し祈る日となりますように、約束を信じて準備する者でありますように。

（執筆・初出：金明瑾・2009年11月）

第177日

ルカによる福音書17：11～19

「その中の一人は、自分がいやされたのを知って、大声で神を賛美しながら戻って来た」（15節）。いやされた十人中ただ一人、サマリア人が、イエスの足もとにひれ伏して感謝したのです。だれに救われ、愛されているのかをはっきり覚えて感謝する礼拝から、すべてが始まります。主イエスに「立ち上がって、行きなさい」と背中を押されて、この人の信仰の歩みの第一歩が始まりました（19節）。わたしもそうです。

（執筆・初出：花房光江・2009年10月）

第179日

ルカによる福音書18：1～14

「イエスは、気を落とさずに絶えず祈らなければならないことを教えるために、弟子たちにたとえを話された」（1節）。肉体を持って生まれる命はすぐに呼吸し続けなければなりません。霊に生きることも呼吸が必要で、それが祈りです。信仰生活は祈る生活と言っても良いでしょう。「神を畏れず人を人とも思わない」（2節）不正な裁判官でも絶えず祈る者の祈りを聞いてくれるのです。祈る特権を使わない手はありません。

（執筆・初出：金明瑾・2009年11月）

第180日

ルカによる福音書18：15～30

「神おひとりのほかに、善い者はだれもない」（19節）。人間は自らの力で神の望まれる善いことを行うことは不可能です。なぜなら人間はみな罪人だからです。「力の限り掟を守り『善い』業を行ったので永遠の命を手に入れられますよね」という金持ち議員の質問に対してイエスは、人間の行う善の限界を示されました。永遠の命は、行いによるものではなく、十字架の恵みに胸を打つ者に与えられます。

（執筆・初出：金明瑾・2009年11月）

第182日

ルカによる福音書19：1～10

「ザアカイは急いで降りて来て、喜んでイエスを迎えた」（6節）。社会のアウトサイダーと接触を持たれるというイエスの噂を聞いて、ザアカイは一目見ようと思いました。お会いしようではなく「見よう」としたのです。その彼に、主の方からおつきあいを申し出られます。それを喜んで迎えたこの瞬間が彼の転機でした。その瞬間にためらい、遠慮して主を遠ざける人々の、何と多いことでしょう。

（執筆・初出：笹山緑・2011年1月）

第181日

ルカによる福音書18：31～43

「イエスは立ち止まって、盲人をそばに連れて来るように命じられた」（40節）。エルサレムに向かうイエスの足を止める者がいました。この歩みは、人類のために十字架を背負う、大きな使命を果たすためです。にもかかわらず一人の盲人が、主イエスの足を止めたのです。ここに、犠牲を払い、仕えるメシアの本質が現されています。救い主はビジョンのためであっても、足元を無視することは決してありません。

（執筆・初出：金明瑾・2009年11月）

第183日

ルカによる福音書19：11～27

「わたしが帰って来るまで、これで商売をなさい」（13節）。26節の、持っている者はさらに与えられるうんぬんの言い回しは、時々わたしを落ち込ませます。そうなんだよね、小さく弱い者は、と。でも聖書が示しているのはそんなことではありません。主人が誰にも同じように信頼を傾けて言いつけ、期待したのは13節のことに全力で取り組むこと。主人の言葉に従順に従い、本気で取り組むことだったのです。

（執筆・初出：笹山緑・2011年1月）

第184日

ルカによる福音書19：28～48

VIPを歓迎するとき、レッドカーペットやリムジンが用意されます。そして旗を振りながら歓声を上げる人々によって軍事的、政治的勝利が示されます。しかしイエスのエルサレム入場にはレッドカーペットの代わりに「人々は自分の服を道に敷いた」（36節）。そしてリムジンの代わりに「子ろば」が準備されました。武力と権力で治める覇者ではなく、人類に犠牲と仕えるために来られたメシアの姿勢が表されています。

(執筆・初出：金明瑾・2009年11月)

第186日

ルカによる福音書20：20～26

「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい」（25節）。

全ては神のものであり、わたしたちはこの世においてそれらの管理を委ねられているにすぎない。これはとても大切な真理です。なぜなら自分で獲得したと考えている限り、わたしたちはその獲得したものに縛られて生きることになるからです。そこに自由はありません。全ては神から委ねられたものです。ここに自由になる鍵があります。

(執筆・初出：石坂和久・2011年1月)

第185日

ルカによる福音書20：1～19

「何の権威でこのようなことをしているのか。その権威を与えたのはだれか」（2節）。権威は今までユダヤの宗教指導者である彼らのものでした。神殿を自分たちの支配下に置き、自分たちの都合のよい言葉を語ってきました。なのに田舎者の若者が現れ、群衆の心を驚づかみにしているのです。長い間の特権と明日への保障が揺らいでいます。彼らは怒りをあらわにしていますが、民衆はもう真の権威に触れ、希望を見出しています。

(執筆・初出：金明瑾・2009年11月)

第187日

ルカによる福音書20：27～47

「すべての人は、神によって生きているからである」（38節）。

すべての人が、神によって生きています。本人が自覚していようとまいと、それは動かせない事実です。だからこそ、神が愛なる方で良かったと改めて思います。わたしたちを心から愛しておられる神によって生かされているからこそ、わたしたちは安心して今日一日を生きることができるからです。ここに平安があります。

(執筆・初出：石坂和久・2011年1月)

第188日

ルカによる福音書21：1～19

「ある貧しいやもめがレプトン銅貨二枚を入れるのを見て」（2節）。お中元の時期になると各デパートでは数々の品物が揃いますが、ポイントは安価でいかに見栄えのよいかどうかです。多くの利用者は心を込めた品物ではなく、あくまでも失礼のない物を求めていますから。イエスが見ておられた金持ちたちの献金は、お中元のようなものだったのかも知れません。生ける神への心からの献金が、イエスを感動させたのです。

（執筆・初出：金明瑾・2009年11月）

第190日

ルカによる福音書22：1～23

主の晩餐の記事を「時刻になったので」と時間のことから始めています。十字架の時がそこまで来ている緊張感をもって次の言葉を丁寧に読んでいきます。「イエスは食事の席に着かれたが、使徒たちも一緒だった」（14節）。イエスが座った後に使徒たちが座る。食事の内容がイエスの体と血に変わる。緊張が痛みに変わるこの食事風景は、今日の教会の姿です。主が共におられますが、まだこの世では苦しみがあります。

（執筆・初出：金明瑾・2009年11月）

第189日

ルカによる福音書21：20～38

「放縦や深酒や生活の煩いで、心が鈍くならないように注意なさい」（34節）。心が鈍くなる。そういう感覚はありますか。神から離れ、神を忘れて生きていくとき、わたしたちの心は鈍くなっていきます。神からの語りかけは聞こえなくなり、心の中は自分の思いやサタンの誘惑などで一杯です。神の前に全てを注ぎ出し、神からの語りかけを静かに聞くときがわたしたちには必要です。

（執筆・初出：石坂和久・2011年1月）

第191日

ルカによる福音書22：24～34

「わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい」（32節）。

わたしたちは一人で生きているわけではありません。イエスの祈りに支えられ、また信仰の友の祈りに支えられているのです。そしてイエスは、そのように支えられているわたしたちが誰かを支えることを願っておられます。今日あなたが祈り支えるべき人は誰ですか？

（執筆・初出：石坂和久・2011年1月）

第192日

ルカによる福音書22：35～53

「そこでイエスは、『やめなさい。もうそれでよい』と言ひ、その耳に触れていやされた」（51節）。

剣を買えと命じられたイエス（36節）ですが、「二振り」で十分だとも言われました（38節）。主イエスの福音は、人を傷つける武器としての剣とは相容れません。むしろ様々な剣で傷ついた人をいやすのが福音です。わたしたちは福音を語っているのでしょうか。未だに剣を振りかざしていませんか。

（執筆・初出：大井満・2009年11月）

第194日

ルカによる福音書23：1～12

「わたしはこの男に何の罪も見いだせない」（4節）。

イエスは神の子であられると共に、全く罪のない唯一の人間であられました。ピラトがイエスをいくら取り調べても、罪を発見できないのは当然です。逆に、わたしたちは罪に満ちた人間ですが、イエスがピラトの裁きを受けて十字架にかかってくださったことにより、罪がないものと神によって認められたのです。

（執筆・初出：大井満・2009年11月）

第193日

ルカによる福音書22：54～71

「主の言葉を思い出した。そして外に出て、激しく泣いた」（61～62節）。わたしたちがたとえ、主を忘れたとしても、いいえそれどころか「知らない」と否定したとしても、主イエスはわたしたちをお忘れになることはなく、愛し続けてくださっています。振り向いてペトロを見つめられた主のまなざしは、非難ではなく、愛の現れです。主の愛に出会ったら、悔い改めの涙を流し、思いっきり泣いてみませんか。

（執筆・初出：大井満・2009年11月）

第195日

ルカによる福音書23：13～25

「その声はますます強くなった」（23節）。

イエスを十字架につけるように求める民衆の声は、静まることなくますますその強さを増していきます。この民衆の声は、わたしを除くだれかの声ではありません。わたしの罪がイエスを十字架の死に追いやったのです。民衆の声を聞くたびに、深い悔い改めを覚えます。わたしたちは今も変わらず、イエスを十字架へと追い立てているのではないかと。

（執筆・初出：大井満・2009年11月）

第196日

ルカによる福音書23：26～43

「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」

(34節)。

キリスト教の本質、それは赦しです。クリスチャンは赦された者です。そして教会は、イエス・キリストのゆえに赦し合う群れです。神は赦された者であるわたしたちに、隣人を赦すことを求めておられます。赦すべき相手はいませんか？あなたが誰かを赦すならば、それは大きな証しとなります。

(執筆・初出：石坂和久・2011年1月)

第198日

ルカによる福音書24：1～12

「あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ」(6節)。

エルサレムの「園の墓」と呼ばれるところに、この御言葉が飾ってありました。その御言葉を見たとき、主イエスは確かに復活なさったとの喜びがわき上がってきました。主は墓になどおられないのです。罪と死に勝利し、復活の体の初穂となりました。死が絶望ではないと言われるのは、キリストが復活されたからです。

(執筆・初出：大井満・2009年11月)

第197日

ルカによる福音書23：44～56

「見物に集まっていた群衆も皆、これらの出来事を見て、胸を打ちながら帰って行った」(48節)。

イエスの十字架の死を見た人たちは、それぞれ深く心を動かされました。「イエスを十字架につけよ」と叫び狂っていた人たちもです。生も死も神にゆだねるイエスの姿に、人々の心は動かされるのではないのでしょうか。わたしたちのあり方が、そういう証しをするものでありますように。

(執筆・初出：石坂和久・2011年1月)

第199日

ルカによる福音書24：13～35

「話し合い論じ合っていると、イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた」(15節)。

この御言葉はとても大切なことを教えています。第一に、わたしたちが日々直面している問題に、イエス御自身から近づいてきてくださるということ。第二に、主はわたしたちと共に歩んでくださいます。問題は、わたしたちが直面する問題に夢中になって、主が共におられることに気付かないことです。

(執筆・初出：大井満・2009年11月)

第200日

ルカによる福音書24：36～53

「彼らが喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっているので、イエスは、『ここに何か食べ物があるか』と言われた。そこで、焼いた魚を一切れ差し出すと、イエスはそれを取って、彼らの前で食べられた」（41～43節）。主イエスは、弟子たちと会話して共に食事ができる体で復活されました。十字架の傷がある手足も見せてくださいました。主イエスを信じるわたしたちも、体を与えられて終わりの日に復活します。

（執筆・初出：坂井一富・2011年2月）

第201日

ヨハネによる福音書1：1～18

「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た」（14節）。神の言葉は単なる言葉ではありません。言葉は人の子として生きられました。「肉」とはわたしたちの「肉体」のことでもあり、わたしたちの「日常」のことでもあります。神の子はそこに来てくださり、そこに住んでくださいました。あなたはもしかして、霊的な必要としてだけイエスを迎えていませんか。それでは神の栄光を見ることはできません。

(執筆・初出：高橋竹夫・2001年6月)

第203日

ヨハネによる福音書1：35～51

ナタナエルは、自分の先入観からフィリポの言ったことを信じませんでした。悪意があったわけではなく、彼が常識的な人物だったということでしょう。しかし、実際に主イエスに会ったとき、彼の常識はひっくり返り、主を信じました。わたしたちも、ときに先入観や常識で神のことを判断しようとしてしまいがちですが、神の思いと御業は常にわたしたちの常識を越えています。主に期待し、「もっと偉大なこと」を見させていただきましょう。

(執筆・初出：品川謙一・2001年6月)

第202日

ヨハネによる福音書1：19～34

「その翌日、ヨハネは、自分の方へイエスが来られるのを見て言った。『見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ』（29節）。イエスを一言で表す言葉です。ヘブライ思想は象徴的で具体的な傾向があると言われます。「小羊」と言えば誰もがエジプトで過ぎ越しにほふられた羊を思い出すはずで、死の災いから救われた理由が、小羊の血を家に塗ったこと以外に何もなかったことは、イエスの血潮以外に救いがないことを思い起こさせます。

(執筆・初出：金明瑾・2011年7月)

第204日

ヨハネによる福音書2：1～12

「イエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行って、その栄光を現された。それで、弟子たちはイエスを信じた」（11節）。常識で考えられないことが起きたとき、その出来事を奇跡と呼びます。水がぶどう酒に変わったのは奇跡です。しかし、聖書の著者は「しるし」と書きました。これはその出来事が目的を持つということです。問題が奇跡的に解決するのが目的ではなく、イエスを信じるための奇跡が行われたのです。

(執筆・初出：金明瑾・2011年7月)

第205日

ヨハネによる福音書2：13～25

神に献げる犠牲は、本来自分自身を献げる覚悟を持って、献身や悔い改めの表明として行われるものでした。そのような真実な献げ物は痛みを伴いますが、この世の思い煩いや束縛から人を解放します。イエスは神殿で献げられる犠牲が、いつの間にか商売になってしまい、真実に神を愛し、人を解放する礼拝が献げられなくなっていたことを悲しまれたのです。わたしたち自身の献げ物をもう一度吟味しましょう。

(執筆・初出：品川謙一・2001年6月)

第207日

ヨハネによる福音書3：16～21

ヨハネによる福音書3章16節は、聖書の中の聖書と言われるほど、神の救いの計画を明確に言い表した箇所です。自分の子どもを与えるということは、自分自身の命を献げるよりもむずかしいことです。しかし、神はその独り子イエスを死に引き渡したほどに、わたしたちを愛してくださいました。それは、わたしたちが自分の行いや資格によってではなく、ただ「信じる」ことによって救われるためでした。主の深い愛に感謝しましょう。

(執筆・初出：品川謙一・2001年6月)

第206日

ヨハネによる福音書3：1～15

「年をとった者が、どうして生まれることができましょう。もう一度母親の胎内に入って生まれることができるでしょうか」(4節)。イエス・キリストの十字架によって、人は新たに生まれることができるようになりました。イエスを救い主として信じ受け入れたときから、わたしたちの人生は、永遠の命による新しい人生となっているのです。あなたは、もう新しい人生を歩んでいます。

(執筆・初出：石坂和久・2015年4月)

第208日

ヨハネによる福音書3：22～36

人々には、ヨハネとイエスとの区別がつかなかったようです。ヨハネの弟子たちにはヨハネの方が偉いという気持ちがあったのではないのでしょうか。そこでヨハネははっきりと自分の身分・役割を示し、イエスが特別な方であることを証言します。イエスこそ神の御子であり、永遠の命を与えられる方であると。教会も信者もイエスが神の子であられることを証言しなければなりません。それが与えられた使命です。

(執筆・初出：大井尚・2004年10月)

第209日

ヨハネによる福音書4：1～26

サマリア人は「この山」(ゲリジム山)で礼拝をし、ユダヤ人はエルサレムで礼拝をするという対立がありました。イエスは「この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る」(21節)と語られました。旧約聖書の時代から新約聖書の時代へと、神の働きは移ってきています。あらゆる確執を越えて、イエス・キリストの福音は、すべての人間を唯一の真の神へと導き、礼拝するようにと招いておられます。

(執筆・初出：大井尚・2004年10月)

第211日

ヨハネによる福音書4：43～54

「しるしや不思議な業を見なければ、決して信じない」(48節)。

これが人間の現実であり、限界です。しかし、イエスの救いの業は人間の現実を超えます。イエスが「あなたの息子は生きる」と言われた同じ時刻に、病気はいやされていました。人間の信仰を超えて神の業は行われます。イエス・キリストの救いの業は、そして福音は、人間の思いや業を超えているのです。イエス・キリストの言葉を信じるのが信仰です。

(執筆・初出：大井尚・2011年7月)

第210日

ヨハネによる福音書4：27～42

人目を避けていた女性が、イエスに出会った後、町に行き人々に主を告げ知らせる者に変えられました。彼女は「福音を宣べ伝えなければならない」という義務感に駆られて町に行ったのではなく、ただ主イエスに出会い、愛された喜びで飛び出したのです。神のご計画は愛の循環です。もし義務感に駆られて奉仕しているなら、まず主のもとに行き、主の愛を注いでいただきましょう。真の主の働きは愛の中からはか生まれませんからです。

(執筆・初出：品川謙一・2001年6月)

第212日

ヨハネによる福音書5：1～18

イエスに「良くなりたいか」(6節)と聞かれたとき、38年間病気で苦しんでいる人は状況を言い訳するのに精一杯でした。核心をついた問いかけをされても、もはや願いが口から出てこなかったのです。イエスは「起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい」(8節)と言われ、この人の心の奥底の諦めかけている正直な願いが御言葉と結び合いました。わたしたちの痛み、諦めている回復に切り込んでくださるのはイエスだけです。

(執筆・初出：和泉美和子・2015年4月)

第213日

ヨハネによる福音書5：19～30

人々は神とイエスの関係を知らないために、イエスにつまずいています。イエスは父なる神と自分との関係を語られます。「父がなさることはなんでも、子もそのとおりにする」(19節)。その究極は「子も、与えたいと思う者に命を与える」(21節)です。

人間に真の命を与えてくださるのは主イエスです。「その声を聞いた者は生きる」(25節)。イエス・キリストへの信仰は人間に命を与えるのです。

(執筆・初出：大井尚・2011年7月)

第215日

ヨハネによる福音書6：1～15

神は全知全能の方であり、何でもおできになる方ですが、わたしたち人間を用いてその御業を現そうとされます。

ここでも、主は天からマナを降らせるというような方法ではなく、一人の少年が持っていた「大麦のパン五つと魚二匹」を用いて、人々の必要を満たされました。小さなものでも、主が祝福して用いてくださるならば、偉大な働きをすることができます。今日も主が小さなわたしを用いて、御業を現してくださいませように。

(執筆・初出：品川謙一・2001年6月)

第214日

ヨハネによる福音書5：31～47

日本のクリスチャンは、どちらかというと聖書知識はあるが信仰が育たず、生活がちっとも変わらないと言われます。それは、39～40節でイエスが言われたように机上の聖書研究ばかりが先行して、命の源であられる主イエスのもとに行こうとしないからです。

聖書の信仰は教えに生きるのではなく、今日も生きておられる復活の主と心を通わせ、共に生きることです。この一日も主と共に歩ませていただきましょう。

(執筆・初出：品川謙一・2001年6月)

第216日

ヨハネによる福音書6：16～33

「神のパンは、天から降って来て、世に命を与えるものである」(33節)。

わたしたちはこの世に生きているので、どうしてもこの世にあるもので満足を得ようとしたり、この自分の命の問題でさえ、その解決を世の中のものに求めてしまう愚かさがあります。きょうのみことばにもう一度立ち返りましょう。わたしたちを生かす真の命は天から降って来たのです。この命を喜び、この命のすばらしさを告白し続けましょう。

(執筆・初出：和泉美和子・2015年4月)

第217日

ヨハネによる福音書6：34～40

「わたしの父の御心は、子を見て信じる者が皆永遠の命を得ること」(40節)。

この「見る」という動詞は、ただ見るという意味以上に、熟考するという意味です。わたしたちは日常生活の中でイエスの業をたくさん見ることができるはずです。でも、それらを偶然、当然、必然で済ませてしまっていないですか。主イエスのしるしを見つめはじめると、どんな状況の中でも主の平安と豊かさを得ることができるようになっていきます。

(執筆・初出：和泉美和子・2009年3月)

第219日

ヨハネによる福音書6：60～71

「あなたは永遠の命の言葉を持っておられます」(68節)。

人間の知恵や知識あるいは能力では理解できないのが「永遠の命」です。神が人間をお造りになったとき、「命の息を吹き入れられた」(創世記2章7節)、それが「永遠の命」です。ところが、人間は罪を犯してそれを失ってしまいました。神はイエス・キリストによってその命を与えようとしておられます。罪の赦し、罪からの救いによって与えられる命です。

(執筆・初出：大井尚・2009年4月)

第218日

ヨハネによる福音書6：41～59

ユダヤ人たちはイエスが神から来られた方であるとはどうしても理解できませんでした。

「これはヨセフの息子のイエスではないか」(42節)。はたして今日のわたしたちはどうでしょうか。信仰のことも人間の次元でしか捉えられないのではないのでしょうか。「信じる者は永遠の命を得ている」(47節)。イエスがわたしたちに与えようとされるのは「永遠の命」です。それは神がくださる新しい命です。

(執筆・初出：大井尚・2011年7月)

第220日

ヨハネによる福音書7：1～9

イエスの兄弟たちは、イエスにエルサレムに行って「業を見せてやりなさい」と勧めています。信仰による理解ではなく人間的な思いによってです。それに対して「わたしの時はまだ来ていない」と断っておられます(実際は行かれました。14節)。イエスの業は人間の計画や要求によってでなく、神の計画であり、御業であることを示しておられるのです。十字架も復活も、そして救いの業も神が行われるのです。

(執筆・初出：大井尚・2004年10月)

第221日

ヨハネによる福音書7：10～24

「自分勝手に話す者は、自分の栄光を求める」（18節）。

聖書のこと、神のこと、イエスのこと、信仰のことなどを自分勝手に解釈したり、話すことは、古今東西そしていつの時代もあるものです。「わたしをお遣わしになった方（神）の教え」を謙虚に、そして祈り深く聞くことが大切です。それは聖書を正しく、そして信仰深く読むことです。信仰を自分に都合よく考える危険性は今日でもありがちです。

（執筆・初出：大井尚・2011年7月）

第223日

ヨハネによる福音書7：37～53

「生きた水が川となって流れ出るようになる」（38節）。イエスを信じる者は命の水で渴くことはなくなります。わたしたちの人生は飢え渴きます。真の水を知らないからです。その生きた水は「霊」のことです。イエス・キリスト、そして聖霊は人間に真の命を与えてくれます。これにあずからない人生は渴ききった人生になります。「だれでも」（37節）来て飲みなさいと言われていました。「だれでも」です。このわたしもです。

（執筆・初出：大井尚・2011年7月）

第222日

ヨハネによる福音書7：25～36

再び「イエスの時はまだ来ていなかったからである」（30節）と語られています。イエスを信じようとする者もいました（31節）。イエスを捕えようとする者たちもいました。

しかし、イエスはすべては神のご計画の中にあるという姿勢をつらぬいておられます。それは十字架と復活が神の計画であり、神の御意志が成就されるべきだとの強い姿勢です。信仰のポイントは十字架と復活です。

（執筆・初出：大井尚・2011年7月）

第224日

ヨハネによる福音書8：1～11

現行犯で捕えられた女に石を投げることができる人は一人もいませんでした。イエスの「罪を犯したことの無い者が・・・石を投げなさい」（7節）との言葉の前に、人々は自分の姿を知らされ、立ち去ります。主イエスだけが石を投げるのできるお方でしたが、「わたしもあなたを罪に定めない」（11節）と宣言されました。全ての人の罪を贖うために十字架にかかる主の言葉が、わたしのための言葉として響きます。

（執筆・初出：和泉美和子・2015年4月）

第225日

ヨハネによる福音書8：12～20

「自分がどこから来たのか、そしてどこへ行くのか、わたしは知っているからだ」(14節)。

わたしたち人間は、生まれたときから死ぬときまでの間しか知り得ません。生まれる前と死んだ後のことを知っているのは主なる神とその子であるイエスだけです。自分以上にわたしのことを知っていてくださる方に人生を委ねること、これ以上に安心なことはありませんね。

(執筆・初出：品川謙一・2015年5月)

第227日

ヨハネによる福音書8：31～47

「真理はあなたたちを自由にする」(32節)。人間にとって究極の自由とは何でしょうか。あらゆる宗教・哲学・学問・思想などが自由を説いています。この所でも真理が自由にすると述べています。

しかし、この真理というのは上述のものの一つに並べられるものではなく、イエス・キリストです。それは究極的には罪からの解放であり自由です。キリストの愛による罪の赦しであり解放です。罪からの自由こそ真の自由です。

(執筆・初出：大井尚・2009年4月)

第226日

ヨハネによる福音書8：21～30

「あなたたちは下のものに属しているが、わたしは上のものに属している。あなたたちはこの世に属しているが、わたしはこの世に属していない」(23節)。

神である主イエスとわたしたち人間はもともと属している世界が違います。しかし、その全く違う世界から、「自分の罪のうちに死ぬ」定めである人間を救うために、あえて人間としてこの世にイエスは来てくださいました。その愛の深さを思い起こしましょう。

(執筆・初出：品川謙一・2015年5月)

第228日

ヨハネによる福音書8：48～59

ユダヤ人たちの信仰は、アブラハムを基準にしており、それによってイエスを批判しています。アブラハムは信仰の父であっても人間にすぎません。

イエスは神から遣わされた神の子です。「アブラハムが生まれる前から、『わたしはある』」(58節)。ここにキリスト教信仰の真髄があります。ユダヤ人がこれにつまずいたように、人間もつまずきます。でもこの方によって神は人間を罪から解放されたのです。

(執筆・初出：大井尚・2009年4月)

第229日

ヨハネによる福音書9：1～12

生まれつき目が見えないということは、この人の人生を暗くしていました。すべての人間はこのような重荷を何らかの意味で背負っています。身体的か、性格的か、能力か、環境か。人間は宿命的なものとして受けとめます。

しかし、イエスは「神の業がこの人に現れるためである」(3節)と語り、その人の目を開かれました。イエス・キリストと出会うことによって、新しい人生が開かれます。

(執筆・初出：大井尚・2009年4月)

第231日

ヨハネによる福音書9：24～41

ユダヤ人たちはもう一度彼を呼び出します。これらの尋問を通して盲人であった人の信仰は段々と確かめられていきます。そして「あの方が神のもとから来られたのでなければ、何もおできにならないはずです」(33節)と言うのです。

これこそ「神の業がこの人に現れた」(3節)結論でしょう。ただ目が見えるようになったという自己的な段階から、神の業であるという証しへと進んでいくことが、大切な聖書の信仰です。

(執筆・初出：大井尚・2009年4月)

第230日

ヨハネによる福音書9：13～23

ファリサイ派の人々は、どうして見えるようになったのかと状況と方法論を問題にしています(15節)。

多分このような事件が起こったとき、多くの人はそのように聞くでしょう。しかし、問題は方法論ではありません。誰がどういう理由と目的でこのようにしたかです。イエスがわたしたちに関わってこられるのはこのためです。罪という重荷から解放し、イエス・キリストという新しい世界に生かすためです。

(執筆・初出：大井尚・2009年4月)

第232日

ヨハネによる福音書10：1～21

「わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない。その羊もわたしの声を聞き分ける。こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる」(16節)。

主イエスの願いは囲い(教会)の外にいる人々もご自分の群れに導かれることです。ここでのポイントは、その人々も主イエスの声を聞き分けるということです。主が導こうとされている人々のところへ遣わしていただきましょう。

(執筆・初出：品川謙一・2015年5月)

第233日

ヨハネによる福音書10：22～42

「いつまで、わたしたちに気をもませるのか。もしメシアなら、はっきりそう言いなさい」(24節)と、ユダヤ人は主に迫っています。彼らは主を信じたいのではなく、ただ、自分が満足するように語れ、示せと言っているのです。自分を中心にした考えで御言葉を読んでいけば、いつまでも主の御業は見えず、その結果はキリストを拒否することになります。主の羊として御声を聞き分け、従い、永遠の命にあずかりましょう。

(執筆・初出：花房光江・2001年7月)

第235日

ヨハネによる福音書11：17～37

「心に憤りを覚え」(33節)とあります。何を憤られたのでしょうか。それは、おそいかかる病と死に対する人間の無力さ、死んでいった兄弟を泣きながら葬らざるを得ない人間のはかなさがあらわになっている、この現実に対してではないでしょうか。イエスの流された涙に、弱い存在である人間への深い憐れみが伝わってきます。主よ大丈夫です。わたしにはあなたの十字架と復活という罪と死の現実への勝利があります。

(執筆・初出：三浦寿夫・2004年11月)

第234日

ヨハネによる福音書11：1～16

「この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである。神の子がそれによって栄光を受けるのである」(4節)。

ラザロの姉妹たちの願いは彼が死ぬ前に助かることだったでしょう。しかし、神の目的は違うところにありました。死んだラザロが生き返ることで多くの人々が主イエスを信じ、永遠の命へと導かれました。ときに神の御業はわたしたちには不可解ですが、そこに主の御業がなされることを信じて歩みたいと思います。

(執筆・初出：品川謙一・2015年12月)

第236日

ヨハネによる福音書11：38～44

主イエスの祈りはまず、絶対的な神への信頼から始まっています。そしてただ、神の栄光が現れることだけを求めておられます。このとき、主が神から遣わされた方であることを人々が信じるために奇跡が起きました。死んで4日たったいたラザロが主の声によって墓から引き出されました。今日もわたしたちが神を信じ、ただ神の栄光を願う祈りを献げるとき、神はすばらしい業をわたしたちの中に行われ、栄光を現してくださいませ。

(執筆・初出：花房光江・2001年7月)

第237日

ヨハネによる福音書11：45～57

「一人の人間が民の代わりに死に、国民全体が減びないで済む方が、あなたがたに好都合だとは考えないのか」（50節）。

カイアフアはまったく人間的政治的な判断と動機からこう提案しました。しかし、この神に敵対する恐るべき謀略のうちには確かな真理が語られています。イエス一人の死によって、すべての人に救いの道が開かれたのです。神は全てを支配し導かれるお方です。

（執筆・初出：石坂和久・2009年4月）

第239日

ヨハネによる福音書12：12～19

「イエスはろばの子を見つけて、お乗りになった」（14節）。

主イエスは預言されていたとおりに、謙遜と従順のシンボルであるろばに乗って、堂々とエルサレムに入城されました。主イエスこそ人々の罪を赦す救い主、神の御業を成就された神の子、王の王です。弟子たちは、主イエスが栄光を受けられたとき、このことを理解できたと証言しています（16節）。今、聖霊はわたしたちを導いておられます。

（執筆・初出：花房光江・2011年8月）

第238日

ヨハネによる福音書12：1～11

イエスはマリアの行為を受けられました。マリアの香油を注ぐ行為は、イエスを油塗られた者、メシアとする儀式となりました。このマリアの行動は、異例であり無駄なものと同様に違いありません。しかし、それは、マリアのイエスへの強い愛の現われでした。イエスはそれを「葬りの準備」としてお受けになりました。十字架について行かれるイエスに献げられたこの行動は、ユダの人間的な判断の前に輝いています。

（執筆・初出：三浦寿夫・2004年11月）

第240日

ヨハネによる福音書12：20～26

「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ」（24節）。

イエスの死は、わたしたちが生きるようになるためです（ヨハネの手紙一4章9節）。イエス・キリストが罪人として死んでくださったことによって、罪人が義とされました。わたしたちは自分の命を大事にするのではなく、御子が与えてくださった永遠の命を愛するものです。それが、地に落ちて死んだ麦の実りです。

（執筆・初出：三浦寿夫・2015年5月）

第241日

ヨハネによる福音書12：27～36a

「父よ、御名の栄光を現してください」(28節)。主は「今、わたしは心騒ぐ」(27節)と、この時からの救いを祈られました。しかし、なお祈りは続きます。すべての人の救いのためにご自身の贖いの死が必要なことを覚えて、神の栄光が現れるようにと祈られました。日々の出来事に心を騒がせ、悲しみや不安に陥りやすいわたしたちですが、愛と憐れみに満ちた、神の秘められたご計画を信頼して主イエスと同じように祈りましょう。

(執筆・初出：花房光江・2011年8月)

第243日

ヨハネによる福音書13：1～20

十字架を前にして主イエスは「世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた」(1節)のです。すでに自分を裏切る考えを持つユダだけでなく、すぐ後にすべての弟子たちが自分を裏切ることを主は知っておられました。しかし、それ故にこそ、主は夕食を共にし、弟子たちの足を洗い、決して弟子たちが忘れることのできない教えを身をもって語られたのです。彼らを再び立ちあがらせたのは、この主の愛でした。

(執筆・初出：花房光江・2001年7月)

第242日

ヨハネによる福音書12：36b～50

「彼らは、神からの誉れよりも、人間からの誉れの方を好んだのである」(43節)。

ドキッとさせる言葉です。なぜなら自分自身の言動の根っこをよく探してみると、人間からの誉れを求めていることに気付かされることがあるからです。しかし、わたしたちがまず求めるべきは人間からの誉れではなく、神からの誉れです。そこに本当の祝福があります。自分の言動はどちらに根ざしていますか。

(執筆・初出：石坂和久・2019年1月)

第244日

ヨハネによる福音書13：21～30

「ユダがパン切れを受け取ると、サタンが彼の中に入った」(27節)。

なぜイエスはユダにパン切れを渡されたのか。なぜ、イエスはそれを止めなかったのか。ユダがかわいそうではないか。そんな風に悩んだことがあります。しかし、それは、人間であるわたしが自分の納得のために、サタンの働きを許可される神を裁いているのだと気付きました。神のなされる愛の行為の結末を、わたしたちはまだ本当には知らないのです。

(執筆・初出：三浦寿夫・2015年5月)

第245日

ヨハネによる福音書13：31～38

「互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる」(35節)。

わたしたちが主イエスの弟子である証明はただ一つです。わたしたちの心に聖霊の実である愛が与えられているかどうかです。これは努力して得られるものではなく、神の贈り物です。たがいに愛し合う姿を通して主を伝えることができる。教会でも、世においても、愛し合う姿を通して伝道に励みましょう。

(執筆・初出：花房光江・2011年8月)

第247日

ヨハネによる福音書14：15～31

「父とわたしとはその人のところに行き、一緒に住む」(23節)。父と子なる神が、聖霊において、わたしと共にいてくださる約束です。三位一体の神は、愛によって完全に一つであります。その神が、わたしたちをその交わりにあずかせてくださいます。それは、聖霊がそのようにしてくださるのです。わたしたちに神の愛を注いでくださり、交わりを与えてくださいます。この造られた者の内に、創造主が住んでくださる祝福です。

(執筆・初出：三浦寿夫・2015年5月)

第246日

ヨハネによる福音書14：1～14

「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない」(6節)。

信仰生活のフォーカス(焦点)は主イエスです。いろいろな問題に直面するとき、自分の信仰を見つめて一喜一憂してしまいがちですが、そこに命はありません。そんなときこそ、自分から目を離して、イエスだけにピントを合わせましょう。そこに「道、真理、命」があるのですから。

(執筆・初出：品川謙一・2005年3月)

第248日

ヨハネによる福音書15：1～17

「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである」(5節)。わたしたちは自分が実を結ぶかどうかばかり気にしがちですが、大事なものは「つながっている」ことです。ぶどうの木であるイエスとしっかり心が通い、信頼関係が育っていけば、自ずと実が結ばれるものです。

(執筆・初出：品川謙一・2005年3月)

第249日

ヨハネによる福音書15：18～27

「世があなたがたを憎むなら、あなたがたを憎む前にわたしを憎んでいたことを覚えなさい」(18節)。クリスチャンであるということに苦勞するとき、主イエスも同じように苦しまれたことを思い出しましょう。決して楽な道ではありませんが、主が歩まれた道です。自分の十字架を背負って、イエスの歩まれた道を主と共に歩いていきたいと思ひます。イエスが「わたしは既に世に勝っている」と宣言されているのですから。

(執筆・初出：品川謙一・2005年3月)

第251日

ヨハネによる福音書16：16～24

「今はあなたがたも、悲しんでいる。しかし、わたしは再びあなたがたと会い、あなたがたは心から喜ぶことになる。その喜びをあなたがたから奪い去る者はいない」(22節)。弟子たちにはこれが何のことなのかわからなかったと思ひます。しかし、十字架と復活の出来事を通して彼らは変えられ、本当の喜びを知る者となりました。わたしたちももう一度十字架と復活の主に出会って、永遠に変わらない喜びを味わいましょう。

(執筆・初出：品川謙一・2005年3月)

第250日

ヨハネによる福音書16：1～15

「その方は、わたしに栄光を与える。わたしのものを受けて、あなたがたに告げるからである」(14節)。

真理の霊はわたしたちにイエス・キリストを証ししてください。真理を御言葉によって示し、悟らせ、イエス・キリストを通してなされた福音の真理をことごとく理解させてください。それによって、十字架に上げられたイエス・キリストがメシアとしての栄光を受けられます。聖霊に聞きましょう。

(執筆・初出：三浦寿夫・2015年5月)

第252日

ヨハネによる福音書16：25～33

「あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている」(33節)。

主こそ復活された本当の神であることを知って、弟子たちは完全に造り変えられました。わたしたちもいつ、どのような苦難や誘惑に襲われるか、一歩先はわかりませんが、必ず勝利できるのです。わたしたちの歩みは、確かな主の御言葉に導かれ、勝利の主に守られているのですから。

(執筆・初出：花房光江・2005年3月)

第253日

ヨハネによる福音書17：1～19

「永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです」(3節)。「永遠」という言葉に時間的に無限というイメージを持っているなら、それは必ずしも十分ではありません。この「永遠の命」はその質を語っています。キリストに結ばれる者は、死によっても、何ものによってもキリストの愛から離されることはない、その希望がここにはあります。

(執筆・初出：和泉美和子・2009年5月)

第255日

ヨハネによる福音書18：1～14

「イエスは御自分の身に起こることを何もかも知っておられ、進み出て、『だれを捜しているのか』と言われた」(4節)。

イエスは、これからその身にどんなことが起こるのか、すべてをご承知の上で、十字架への道を歩まれました。イエスが十字架の贖いへの道を自ら進んで成し遂げてくださったことで、全人類への救いの道が開かれました。わたしたちはこの出来事の上に生きています。

(執筆・初出：穂波安孝・2015年6月)

第254日

ヨハネによる福音書17：20～26

「わたしたちが一つであるように」(22節)。

三位一体の神は常に一体であります。しかし一体ということは、すべて同じということではありません。違いを有しながら互いを尊重し仕え合い、愛し合う関係性を普遍的に持っておられます。わたしたちクリスチャンも同じです。一つの信仰でありながら別々の個性を有し、しかも一体となっていくのです。それが教会の信仰です。

(執筆・初出：高橋竹夫・2011年9月)

第256日

ヨハネによる福音書18：15～27

「ペトロは、『違う』と言った」(17節)。あなたもあのイエスの仲間ではないかと言われたペトロは、最初はその場しのぎのつもりで、二度目には恐怖から、そして三度目は自分の真実を語ったのです。ペトロは確かに主の弟子とされたのです。しかし、ペトロは主の弟子であることを心から否定しました。彼は自分の命を守りましたが、主イエスも信仰も失おうとしていました。しかし、彼はこの暗闇から這い上がってきます。

(執筆・初出：高橋竹夫・2011年9月)

第257日

ヨハネによる福音書18：28～40

「わたしは真理について証しをするために生まれ、そのためにこの世に来た。真理に属する者は皆、わたしの声を聞く」(37節)。

イエスはピラトの尋問に答えられました。しかし、ピラトは、真理なる方が真理を語られても、なお「真理とは何か」と問います。真理に属していないので聞こえないのです。イエスの声を聞かせていただいた恵みに心から感謝しましょう。

(執筆・初出：三浦寿夫・新規)

第259日

ヨハネによる福音書19：16b～27

「それには、『ナザレのイエス、ユダヤ人の王』と書いてあった」(19節)。

ピラトはユダヤ人たちに負けてイエスを引き渡しました。しかし、罪状書きの変更は許しませんでした。さまざまな思惑の中でなされたことの背後で、神の御計画が進んでいきます。ヘブライ語、ラテン語、ギリシャ語で書かれた「ユダヤ人の王」は世界の王を暗示しています。イエス・キリストこそまことの王です。

(執筆・初出：三浦寿夫・新規)

第258日

ヨハネによる福音書19：1～16a

「イエスは答えられた。『神から与えられていなければ、わたしに対して何の権限もないはずだ。だから、わたしをあなたに引き渡した者の罪はもっと重い』」(11節)。ヨハネによる福音書は、人は誰もイエス・キリストを裁く権限がないことを強調しています。なぜなら、イエスは神の子、罪のない方だからです。主イエス・キリストはわたしたちの罪の贖いのために、父なる神のご意志に従って十字架につかれたのです。

(執筆・初出：坂井一富・2009年5月)

第260日

ヨハネによる福音書19：28～37

「彼らは、自分たちの突き刺した者を見る」(37節、ゼカリヤ書12章10節)。

「彼ら」とは誰でしょう。イエスを十字架につけた者たちです。この者たちは主イエスを十字架へと追いやり、あるいは十字架刑を恐れて主を捨てた人々でした。「自分たちの突き刺した」方を救い主と見ない限り、他の誰かがやったこととして十字架を見ている限り、そこに信仰はありません。生きて働く復活の主イエスとの関係はありません。

(執筆・初出：高橋竹夫・2011年9月)

第261日

ヨハネによる福音書19：38～42

主イエスの葬りという大切なことに用いられたのは、アリマタヤのヨセフとニコデモでした。二人とも今までは堂々と信仰を告白できなかった隠れた弟子だったのです。十字架の後、彼らは恐れから自由になりました。二人は危険を覚悟し、ピラトに願い出、主イエスのために、ヨセフは新しい墓を提供し、ニコデモは丁重な葬りを行いました。人を恐れから自由にし、主に仕える人に変えてくださるのは、十字架の恵みです。

(執筆・初出：花房光江・2005年3月)

第263日

ヨハネによる福音書20：19～31

復活の主にお会いし、聖霊を受けた弟子たちの大きな変化こそ、主の復活が事実であったことを証明する事柄です。聖書が書かれている目的が、「あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるため」(31節)とはっきり書かれています。

聖霊の導きにより、神を礼拝し、聖書の御言葉において主イエスにお会いできる幸いを、心から感謝しましょう。

(執筆・初出：花房光江・2005年3月)

第262日

ヨハネによる福音書20：1～18

「朝早く、まだ暗いうちに、マグダラのマリアは墓に行った」(1節)。このマリアも主の死に敏感に反応しました。しかし、まだ主の復活を信じてのことではありません。十字架までは理解できるが、復活がわからないという人もいます。その人はおそらくニコデモのように、またマグダラのマリアのように主イエスの死を受けとめていないのです。主の死を自分との深い関わりの中で受けとめた者は、必ず復活の主と出会うのです。

(執筆・初出：高橋竹夫・2011年9月)

第264日

ヨハネによる福音書21：1～14

人間をとる漁師として招かれた彼らでしたが、今、もとの生活へと戻ろうとして漁をします(3～4節)。しかし、その結果は徒労でした。夜が明けたころ、復活の主が彼らのために言葉をかけ、網をおろさせます。ここで彼らは大漁を体験しています。その上、用意された朝食で豊かな交わりにあずかり、主であることを知ったのです。キリスト不在の歩みの空しさと、主が共にいてくださる祝福の歩みとの違いがわかりますね。

(執筆・初出：花房光江・2005年3月)

第265日

ヨハネによる福音書21：15～25

3度も主を否定したペトロに対し、主はここで3度、「わたしを愛するか」と問いかけておられます。それは彼を責めているのではなく、彼を弱いまま受け入れ、新しい使命へと遣わしてくださる愛の励ましです。主イエスは、わたしたちにも、「主を愛すること」だけを望んでおられます。「主よ、あなたは何もかもご存じます」としか答えられないわたしですが、そんなわたしをしっかりと受け止めてくださる主の愛を感謝しましょう。

(執筆・初出：花房光江・2005年3月)

*日本キリスト合同教会は、創立以来「きょうのみことば」として、毎月（当初は年4回、三か月に一度）聖書日課を発行してきました。本小冊子は、デジタルデータとして残っている21世紀に入って以降に発行された中から、珠玉のメッセージを再録したものです。本小冊子発行に際して、言葉遣いなどを改めたものも含まれています。今後、数年かけて旧新約全体をカバーする予定です。

きょうのみことば コンプリート版 1

2025年3月1日 初版発行

発行者 田名邊義之

編集者 大井満

発行所 日本キリスト合同教会

173-0004 東京都板橋区板橋3-32-1

日本キリスト合同教会板橋教会気付

電話03(3963)3471

聖書は、日本聖書協会『新共同訳聖書』を使用

「しかし、あなたに言うべきことがある。あなたは初めのころの愛から離れてしまった。だから、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて初めのころの行いに立ち戻れ」。（エフェソの信徒への手紙 2 章 4～5 節。「新共同訳聖書」）



エフェソ（現在のセルジューク）の遺跡、2024 年 3 月